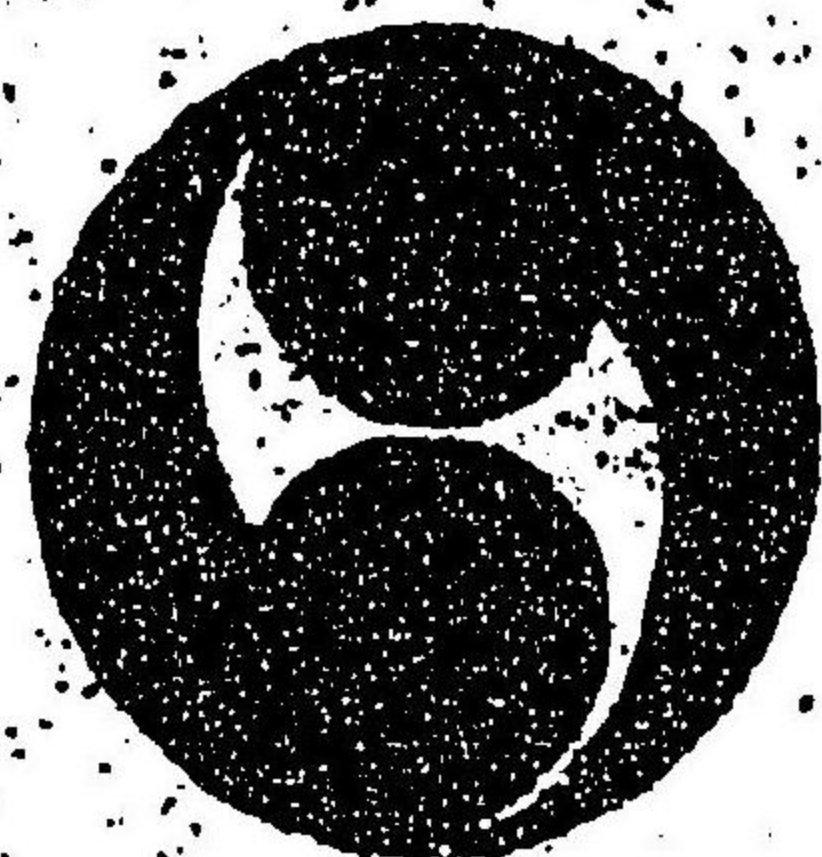


特60

101



繪本忠臣藏

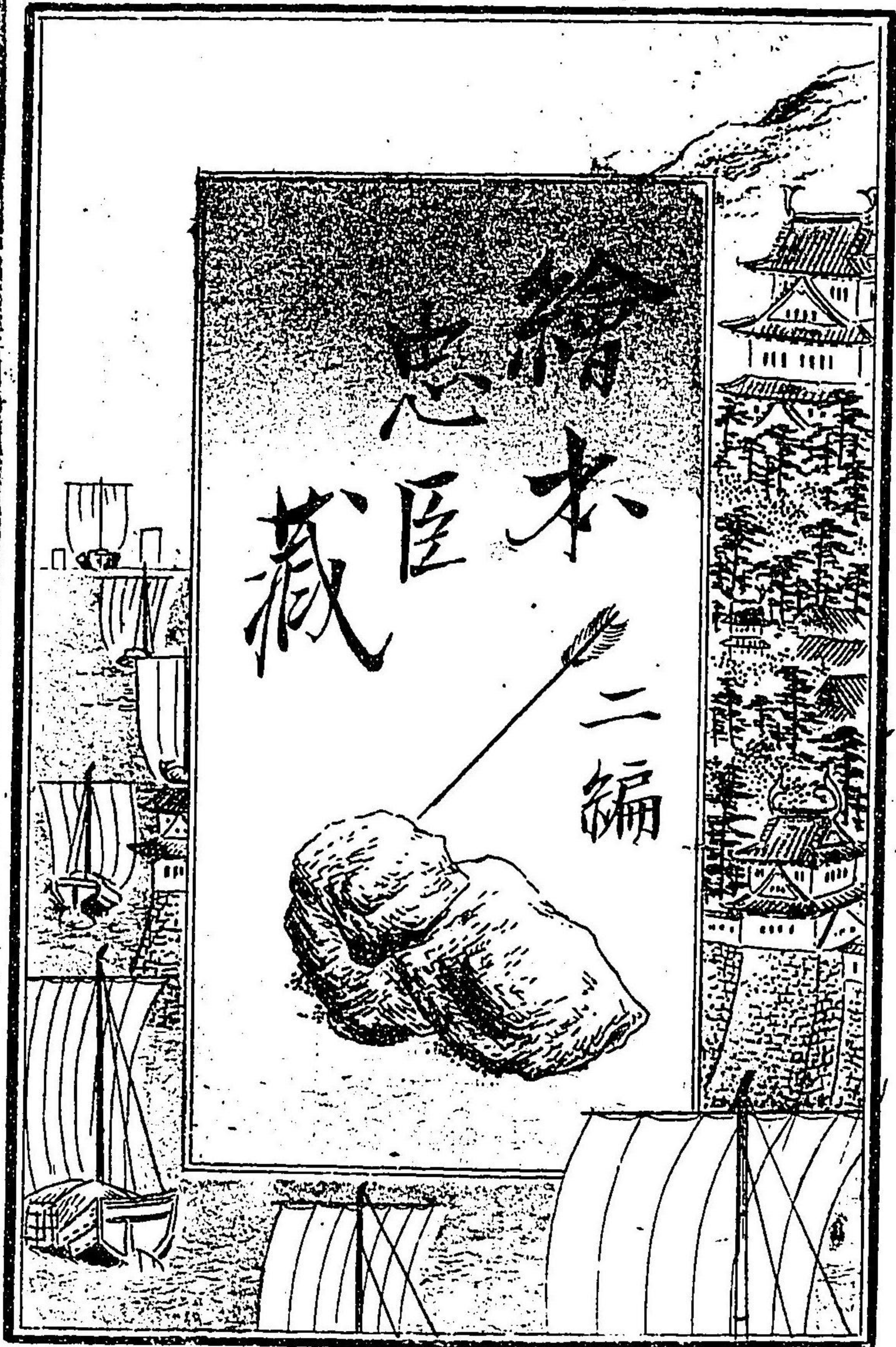
長瀬忠治郎編纂

二
篇

全



大坂 長瀬以盛堂銅版製





二ノ



繪本忠臣蔵第二篇目録

岡島大野と討りる
 岡島八十右衛門が傳
 不破數右衛門が傳
 不破速見と會ふ
 小山三士が宥む
 大星竊は復讐言を告ぐ
 大野金と偷て走る
 大星鎌倉へ趣く
 師直間者で京師へ登せ
 大星戲て天井へ樂書す
 大星誓書と破て強弱を様す
 加茂子茂七父の志を續く
 千崎弥五郎が傳
 岡野銀室門謀て鳥江が乳母を繋る

大野父子我家に走る
 松村父子が傳
 不破鎌倉へ到る
 鎌倉の三士赤尾へ到る
 諸士本城離散
 大星國を去て山科へ到る
 原近左鎌倉へ下向せ
 早野勘平生害
 大星偽て遊里へ耽る
 大星力弥父を諫む
 加茂長助が傳
 大星密計千崎鎌倉へ下向る
 千崎師直が弟中へ入る

繪本忠臣蔵第二篇

岡島八十右衛門討大野

好んで人の長短を議論し、まり正法と是非
 もは吾大に悪む所ふり云り大野が徒已が
 悪を敵んぬ人の正しきを敗る岡島が勇猛
 かんぞ是をばせしんや四月十四日黄昏十右衛
 大野が宅に乗り車内を大野に己れが心は寛
 一あるふかれバ他出と云せて後を逃れんとす
 岡島大野が家僕に向ひて中けるハ物宅あり
 ハ物宅はあらせやバー夜更るにも又表のバー
 とて五階の大野父子大に恐れぬ家賊を
 取片付令中へ退んとす又急ぐといへ
 ども駿しき難をふれ中へ果し難く見たる
 所よ支の刺のさる岡島又よりて門をこえ
 大野討死怖し家僕を出ていまは物宅に在る

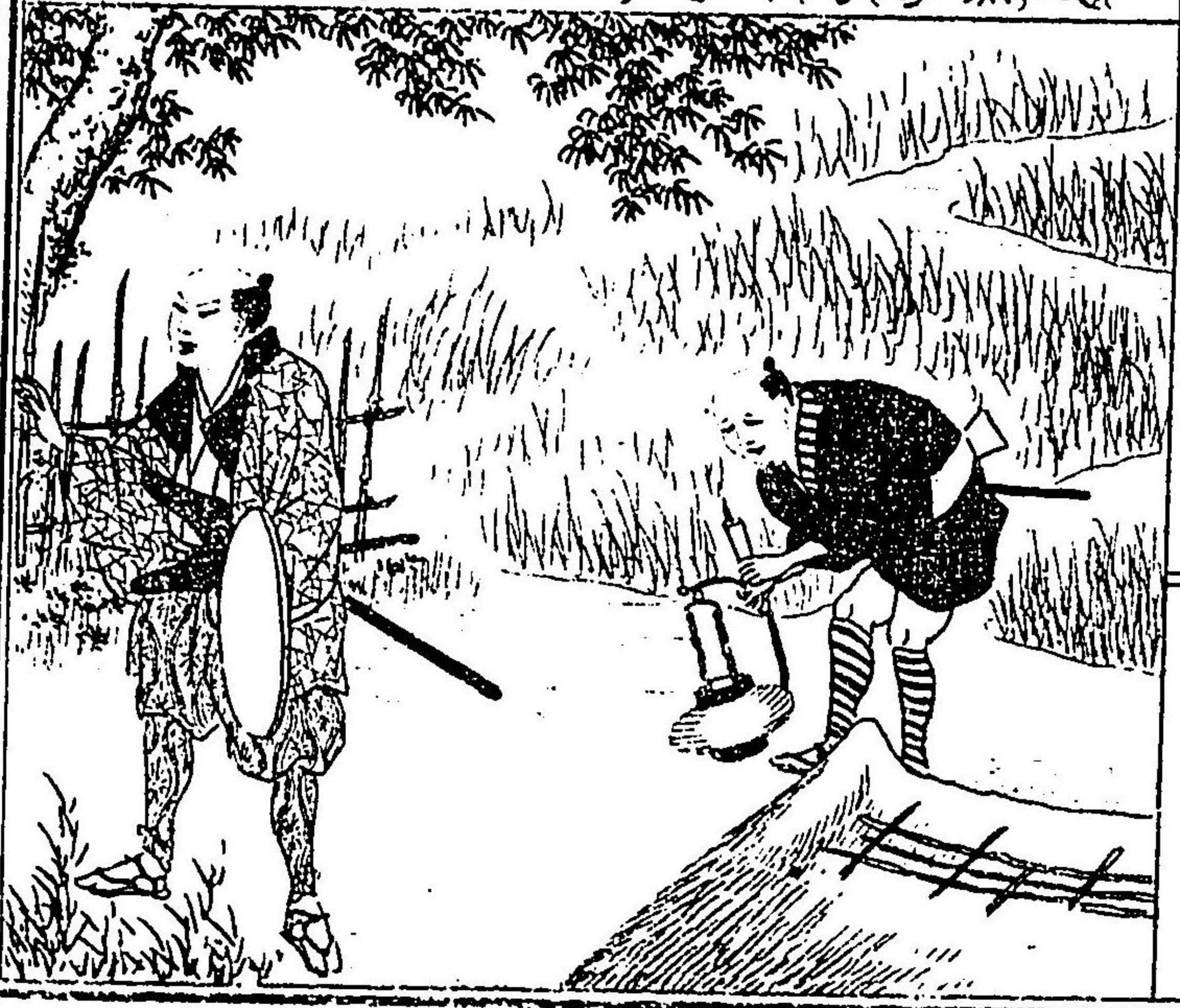


繪本忠臣蔵

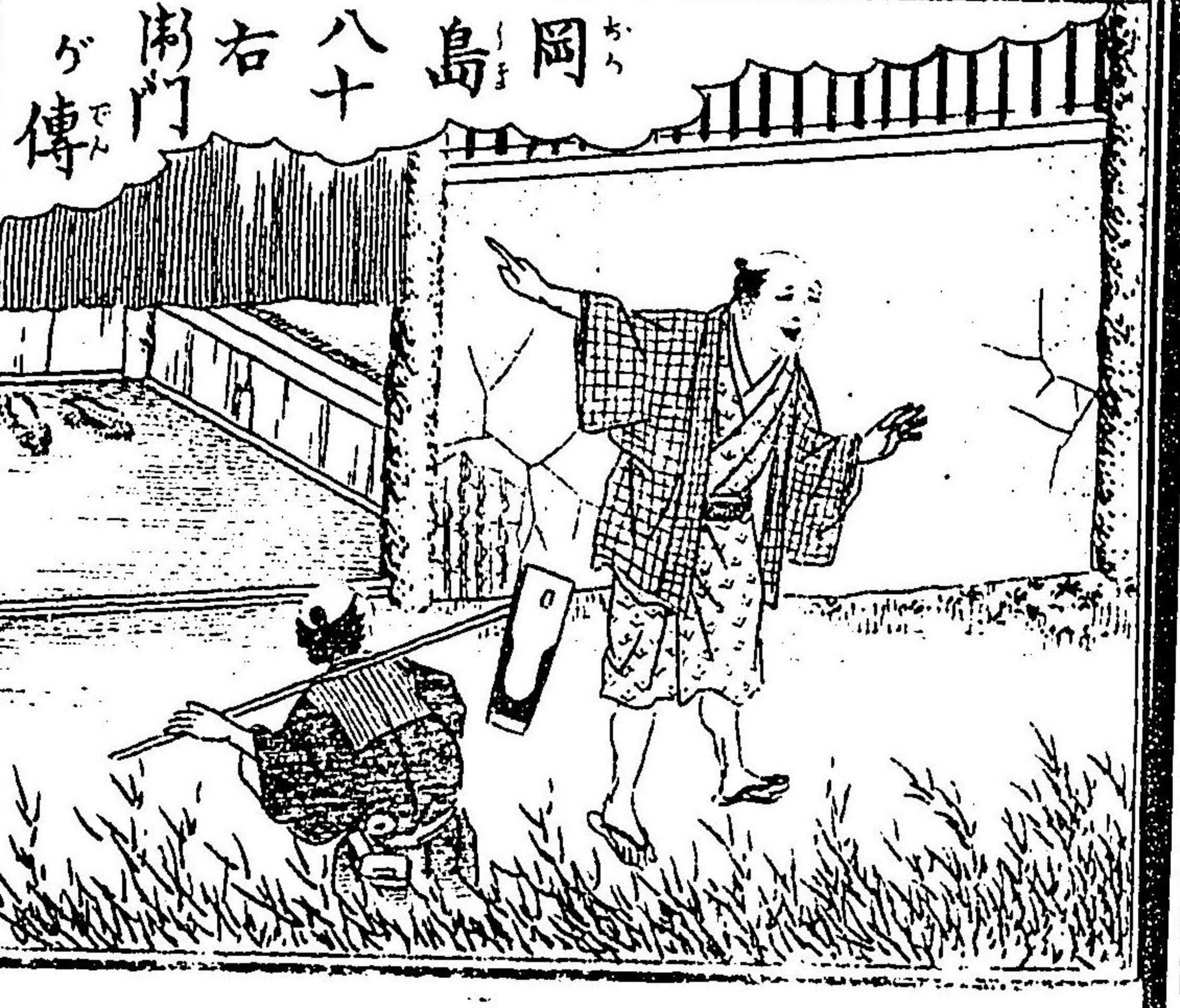
二ノ

岡島八十右衛門が傳

岡島八十右衛門は實康直にして忠義
 赤き男之骨柄運ぶらして大五尺八寸餘
 り刀重流し柄丸開口流の鋼術に達しけり
 主家凶変の三年以て湯治の事を以て願
 き居りけるは公之と名ぬれ湯下
 されしバ私宅に泊りきぐさほおせんと
 身捲入ると妻女夫に向ひ今日もハツ下り
 まてはハハ明ね早とお立有べしと止めければ
 八十右衛門腹をふりやぐ湯下り上
 侍まへもお立の暇を告ふらく明日は延とハ
 武士たる者のせぬること僕又助とまゐる者代
 の者を連て發足とば温泉の湯所ハ赤尾
 七里半松登りて山中の湯と稱せる名湯之
 頃ハ四月下旬三日よりして流し板路
 若うらんとせし時子美昏ま及びければ



蒸の村里にて用意の燈灯火をともさん
 とするは年老くる者岡島が林と見て
 何地へ至ぬぞやと尋ければ八十右衛門
 温泉にまゐるよと流しければ彼老人大
 赤れを判し居あるはハハとや温泉迄ハ
 是より行程四里餘も板道にて人家一
 所もふしは社ハ彼山中に強盗住んで
 数多の旅人をとまき又ハ村に婦女を集ひて
 おのが祭とて只今も其事とて居り所
 之憐村の庄官の嫁はに親母とある道にて
 大の男四五人お来りて彼嫁を奈しいくせ
 ぶく失はしよと見定て彼強盗ホが不業ふる
 べしとのどまの再三より依之白昼とて
 山道を通ふ若し君英治の勇を震いの
 ふとも不業内の板路甚く以て老末ふし今
 赤ハ一宿あり明日七より赤の方一ツの道



岡島八十右衛門が傳

あり道ふりともはるを行りくと遠で
 止りれども元来沈勇の八十お前門大ま
 笑ひ登へ強盗敵百人有世を愛おぢし
 廻り及ぶとては危をさくるハ武夫のな
 地はとわいて彼山及へまきりてけるハ暴
 え過りよりまらま女のまげい若とまま響
 てお津く下男又助きつと泳ね怪や何の火
 糸ぞとけくま近より見れば本木の木
 ま下は大の男七八人松柏の枝を折て酒
 あんも長を足て又助さふくと振いぢ
 いづこては危をさるるべとやけれハ岡
 打笑い何なる幸あふんとてを傍とさ
 んとまは足首をみて盗賊どもをくハ林
 の中とま岡あま後を巻口くコ金少
 とも銭成とも持合せその為命を助
 リヤバと三尺半の大旗指ねきりて三人ハ



其二

前ま立猪る賊ハ後を取春は時八十お前
 かくと打笑いで持合せの金と得と
 一とまよりやく板打先進三人の中成
 男を狗板けて討放返を刀は左の男首
 先より乳の下りけて真ニツ切り放を右
 男もま怒りて逃んとまると後袋袋一切倒
 岡あ大青まで酒代も長まで不足するハ赤尾
 の土岡あ八十お前とまおれれば山左猛
 威を恐れ殊の子を散らばるとま逃失ハ
 十ちらん大まは笑ひ林の中へま入れば光除
 の女松の木は縛れて歎沈と縄を解て子細
 を問ふ近郷の者よては親里へ来る道盗賊
 のろま捕はれれと語りければお老人の語
 一庄官の嫁ふるやお明おバ人を付て送ら
 べ我ホきこも盗人たぐハ金酒あれば
 先入ども吞べると自もおやくとて彼酒を



井伏は松村を温泉に送り彼女を又助に送らせ
親里をゆききける老母は辺の山芝に赤
尾の考とゆききると去るに跡原れりりや

松村父子の傳

孝は藤念の士は松村在平秀直といへる者有
き年耳がよして老士ふれども心勇まして
仕士に耻ばるの妻育てより一國に忠死を交
しければ先伯父の馳名前美の官に後いんと嫡
子三平と密に謀りて云ける我亡君の爲に死
以て報いません本國大星由良といはれ考の
嘗有之を志を本國に下りて今後を云き下り
る本國にて殉死せざるといければ三平も
共は越ん体に入れば秀直まを汝藤念ま
るり老母は仕べと再三も止めければ三平は
を流し父母の思を信しまければ父の思を
其上今旅に後考は考父の恩を取る之程



不破 教 右衛門 亂 行

先致右衛門を藤念はるめりく老母の仇を
救下と先立てわんとは存平も今ハ力なく
父子打違て赤尾はむり良端は合て美心と
あかり神文を以て誓いとふり赤尾の旅飯
をるりける

不破教右衛門の傳

孝は不破教右衛門と云へる者あり其の長六
尺に及び美年の時より初術と好む或ハ持
人をとりてその内の精練一倍もと好む
後ハ清城下へ来るを宿者と扱はれはとても
長を命ハ首よりあきせられて餓死せんより
我の命を得させば好む食物をまきと飽す
べしとせよとて懐き手付居物切打よす
酒妻はやうして養ふとあきて死人と扱ふと
もる木といふ民百姓大をたれ教右衛門は悪事
を非にければ悪人大を怒らんとすい教右衛門



手討まき一歩も引かぬて憤怒を教まき一と
 まいめい不破と名づけけるは先達て教
 方門は告る考ありてまき退りて教一
 正程をも用ひて自悪事を作て罪を
 を退かんとするハ大夫一抱ほどて速敵の
 前まき一りて教方門廣庭へ鳴れ高直自
 切柄終るる刀は捲け程と確と白眼汝
 ケ捲くの勢をも仕おしる不届千万とま
 依て汝もまき一りてまき一と有けれハ不破吉
 退き首上上りて信せる色も一其時
 貞振より下り持ひて正程の例もまき一
 せよと刀を振上りて教方門が髪を
 と切落しりて死骸を不届一但一
 の死骸を腰に挿しりて木小え
 金一色あひてぞ入ぬ不破の覚
 秀の儀をわけてぞ居りて近寄るを打



れど正程ハ罪は送て中へさるあ
 は月何とて報一まき一やとぞ怒り
 城をきて大坂長町の辺りへ位悪
 人と我二君一仕りて朝夕城の方と
 年の年月を送りけるがは夜
 狂気の如く捲上りて直を怒り
 赤尾より番頭をきて夜半の
 細言をいりてとまき一と維
 眩病の考せぬとまき一城内
 噂さるるは似たりとも角も
 抱へけれハ正程も詮方ふく
 り一先大坂までゆりける
 教方門鎌倉へ志

されハ教方門ハ浪人をもてより仕
 業おけれハ二年とまき一内
 北まき一上女房ハ懐妊の上ま



たり一程は今日いふんとも詮方なく数方
 傳つも尚葉の子よそり粉を子へ或人の
 介抱をふりける程は弥渡世をそとて十
 方よきて居しりいづまは移及先原郡
 赤月村は秋月と云るち一人の伯母あ
 りければもいづまは移及先原郡
 仇いもあはんと志ききりさけるが風
 炭炭往來も続ければ故ちら風子名にけ
 るハ武士の飢骨れする時ハ切強強をふに
 恥辱はあはれれども人とあやめ金涙を
 りてハ人なとつれよりお村を以て族入
 ず心と云助力せんと武庫川原の程よ
 何いけるがも一りよりいりて往來の人
 ふくはほさるまるといふともつるま業仕
 れどもははれとぞと思ひさすてもと兼て
 跡へそりず心の一云胸をつんぞくめく



を振り口惜く存命のゐる手を下て故
 なき若も合刀を交んと強きもくとけ
 打らありてぞ居りける
 不破武庫川原まで急見
 鳩詩のさき指へは糸とくふも文藝は住
 を海んぬりあ教善の原を測り尤と極
 朝よ若も定めんがふり物も不破教ち
 ハ武庫川原よとてまき往來もあは
 ず心と云懇んといふハ旅駕の程を速
 れどもはめ来る程をハ希竟と走りあり
 持考事ハ浪人若成が竹を失い妻子飢命
 及ひける何幸活合力を交んぬ直ハ人目と
 恥ハハ原秋よ及い合力をれいと云けれバ
 等の若打笑いふんトがいら社いふとも我
 とがある月ハは下の御ちまハ成へうらと
 云捨てらまきとる操鼻とちへて偏



高貞 不破 教右 乱行 怒る

浄合力下るるへと云ければ若大さま
 怒り従末を妨ぐ大盗人とあ入りて身枝
 まで打てぬると致ちろ二人の首斬つたて
 引まね上まどつと打まぐろ盗賊といふ
 怪千万浪入してとてやうふく武士の首
 まトき面をさうし旗入の袖をふりかきま
 の才かとして理不そま杖をさし切捨る
 奴ふれども助けをば下と驚よ向ひ傷りす
 さぬ浄世心安福ぬれとすけれバ内は赤
 る土始修指子と得とす能よりさ者花灯と
 えさるれと見て不破辰久いや速見君をう
 ぶりといふ声はまつと致ちろハ面目もい
 仕合とさしうらむとて悪くける速見君の
 君とば下より後一さき不破が首はさき
 切え接盛が武士の首い何ぞ恥とさるは足
 んやと互に跡をの首と速見君はさきけり



は度的一件定て及及と入沙國の騒動を
 も左社残念に存せられんとすけれは致ちろ
 と涙を流し我無き世にさしづの悪りきり
 仕合も違ふ事君の海棲は依て一命を食
 せるは清見いつハ報いさる胡やと朝夕君と
 抱し吾等希君の清大さまとさき赤尾
 をせげまはさしと倦れとも城内へ入られし
 ぐいゆり一後何事残念に馳下らんと思
 折悪く妻が大病に竹と矢い今春五月
 伯母の五バもなより彼下し妻子を
 ちの路根とも又残念より日友の親と
 方は余りて仕方もあつんと今春の時且始
 旅人はせんといけけけけけけけけけけ
 末が世道未ださるる不亡君の清見と送
 志し清推を下さるべと初忠美さふく
 涙を流し泣りければお左も不破誠忠と



不破 数右 門見 速見 會

うん！天晴武士の魂！大星氏も遠く
直江ふしやきんる何革命を企てて後日
を待たば原も亦存も亦と難途中と去る
ぎの道途でゆーやさんと金子二まがして不
破の子へ鎌倉へを去る教をうら大星
力を得直折赤月寺村へ立越伯母は余て何
角と極しけれバ伯母も不敵が永との難
を去るんよく妻子を顔り養生とせん
りけがひらバ教をうら大星も悦びも大
板は極り妻子と赤明とへ送らんをせん
も妻の病氣出とのホウまり終大板は
いて満死しけれバ教をうら二文の娘長刀
一振と添て赤月寺の伯母は顔り再び赤尾
池大星も余て美心とあはれといども
大星を免されバ彼地へ送りと極るとん
そい後義士山村は退去するに及んで又

彼地へいりけい！義士の列に加りける

鎌倉三士到赤尾

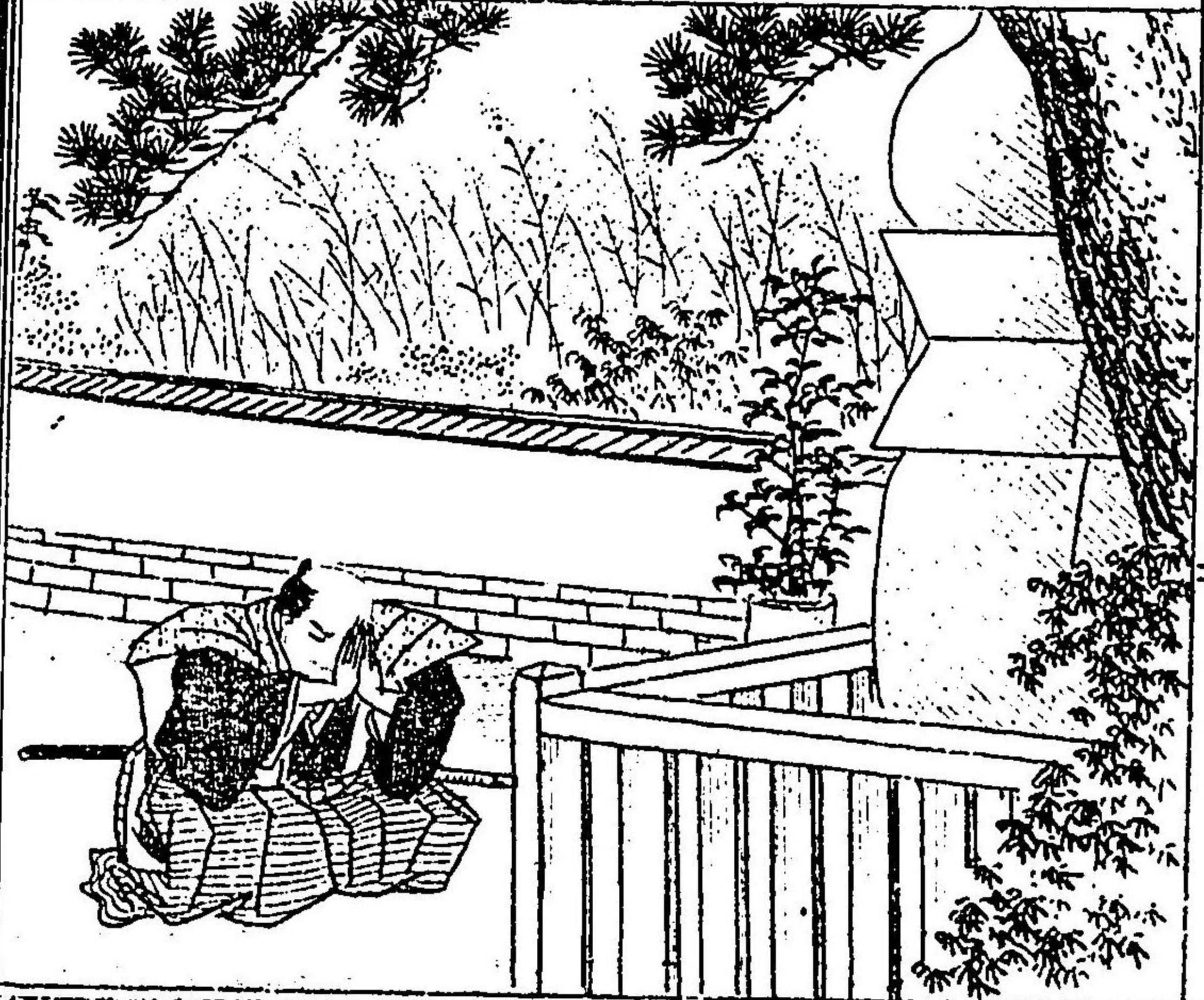
美は鎌倉の士は坂那安兵衛遠久田孫次
牛田郡と赤尾とへる士あり元末美勇の若
なれバ師直が存命と憤り事を添るとん
まども柏井後江は怯弱して美士と担と
船上へ忠義をえせけて後壁の斗略密圖あ
りとして日を短しけるよそ三士ホ大いり
お決してやけるハ我と今まで柏井後江は
うされてうら！日教と種するよそ返り
残念ふりけ上ハ！を國は下りて彼地まで
幸と斗るへ！兼て大星が仁義をせんト
兵道ハ孔明が淵源とて文武を首とせる
よ！受けけれバ今度の難義は於てやハ！と
活て恥辱と思ふんあ！上伯父ハ源
のホ！推懐とん！四月五日鎌倉を



三士以ての外、方とあり、方のがん、すけハ
さる事と怒り、今を謀復、徳の志、なま
上ハ不詮、我と三人腹らき、切泉下の君、
報とべ、とぞ討ける

小山者三士

去後、四月十四日、八七、月の月、ま、當れ、わ
法士、方、の、く、花、祥、さ、る、日、未、活、け、る、と、言、て、ら
の、三、士、も、花、祥、も、ま、り、七、君、の、願、あ、は、皆、で
大、声、ま、て、や、け、る、ハ、我、と、三、人、何、卒、死、法、い
ま、ど、う、り、と、休、中、及、速、く、尚、地、へ、来、り、て、ま
さ、討、む、れ、ど、も、を、謀、復、の、後、ホ、推、ま、て、一、人、後、等、
の、心、ふ、く、城、と、あ、て、戎、馬、の、蹄、よ、う、け、と、せ、と
の、く、城、と、渡、さん、と、さ、る、能、も、傳、授、の、業、類、
と、ぞ、一、と、り、依、之、我、と、三、人、謀、中、ま、て、後、援、
切、士、君、の、為、に、命、を、懸、べ、命、と、惜、と、長、生、を、
る、奴、亦、永、き、世、活、り、よ、ふ、と、言、り、て、ぞ



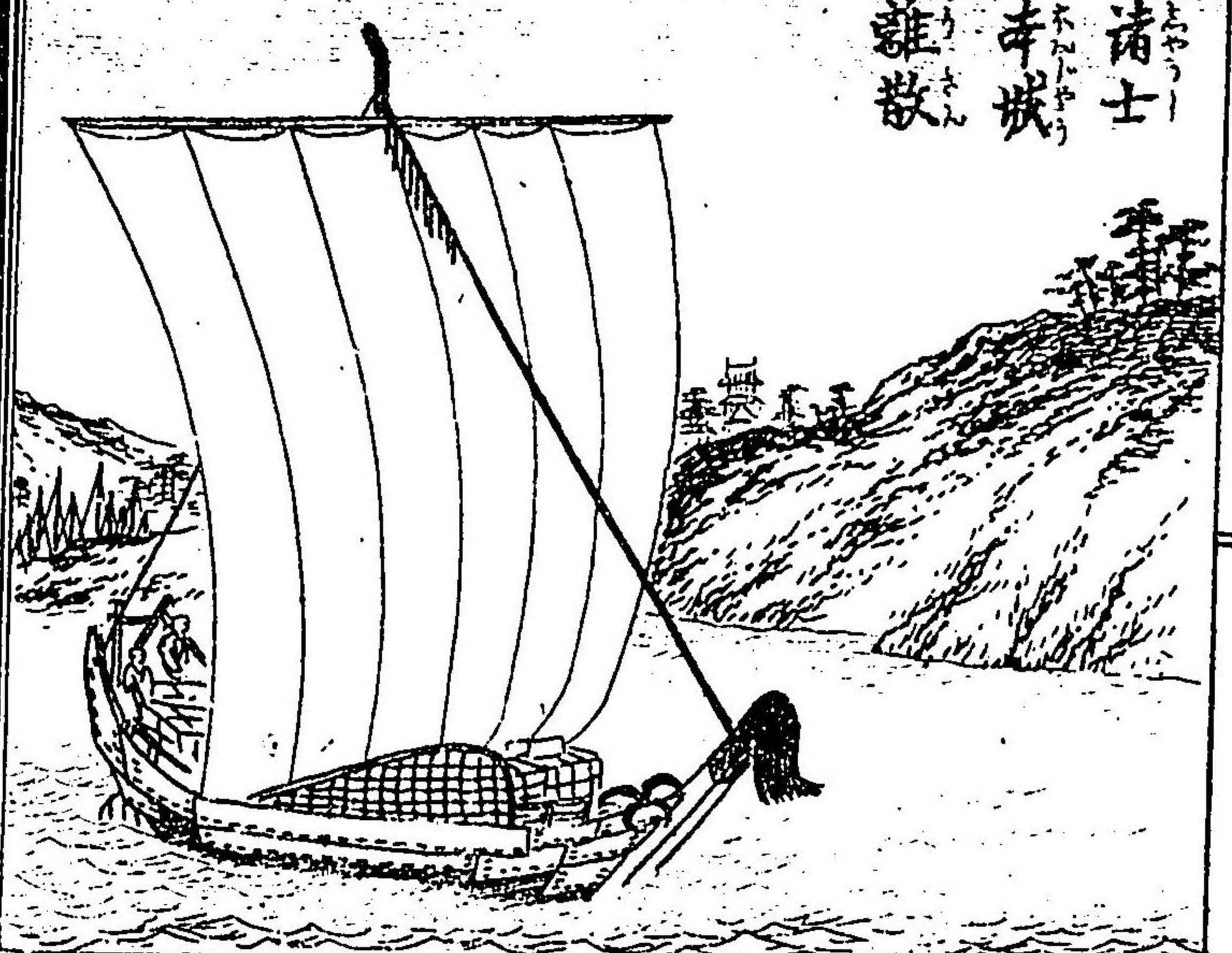
降りける、大、星、ハ、方、大、ま、て、を、と、つ、法、士
ま、向、ひ、て、や、け、る、ハ、鎌、倉、の、三、人、謀、謀、を、林、
と、一、傍、居、女、人、の、差、言、を、討、謀、ま、れ、ん、と、や、ハ、
ん、左、様、は、我、那、の、志、あ、ハ、疾、も、絶、登、り
て、二、ん、ま、き、よ、と、み、ま、は、世、美、の、志、と、も、い、ま、
人、の、怯、弱、何、ぞ、我、身、は、謀、人、彼、ホ、血、氣、の、者、之
と、や、け、る、時、は、小、山、借、五、年、進、と、も、て、や、け、る、
彼、ホ、が、度、ま、ま、の、と、思、と、ま、ま、は、い、ま、彼、ホ、子、里
を、遠、し、と、せ、ば、い、て、尚、地、は、来、り、一、命、を、懸、ん
ト、て、他、と、謝、法、も、い、と、は、美、心、の、強、き、よ、り、ち
て、失、礼、し、及、ぶ、お、ち、る、後、祥、の、志、は、い、ま、く、家、を
を、あ、ら、せ、さ、る、を、以、て、悶、て、法、外、の、志、を、も、士
を、来、よ、り、女、を、謝、し、勝、れ、し、る、男、士、よ、れ、ば、ま、
こそ、れ、い、め、は、婿、那、と、ハ、明、女、の、交、り、あ、れ、い、家、事
を、ま、と、一、審、む、べ、と、い、げ、れ、ば、一、座、の、面、を、
を、掛、入、謀、は、遠、君、の、事、大、死、と、さ、る、と、そ、近

三士 諸の國 欺る



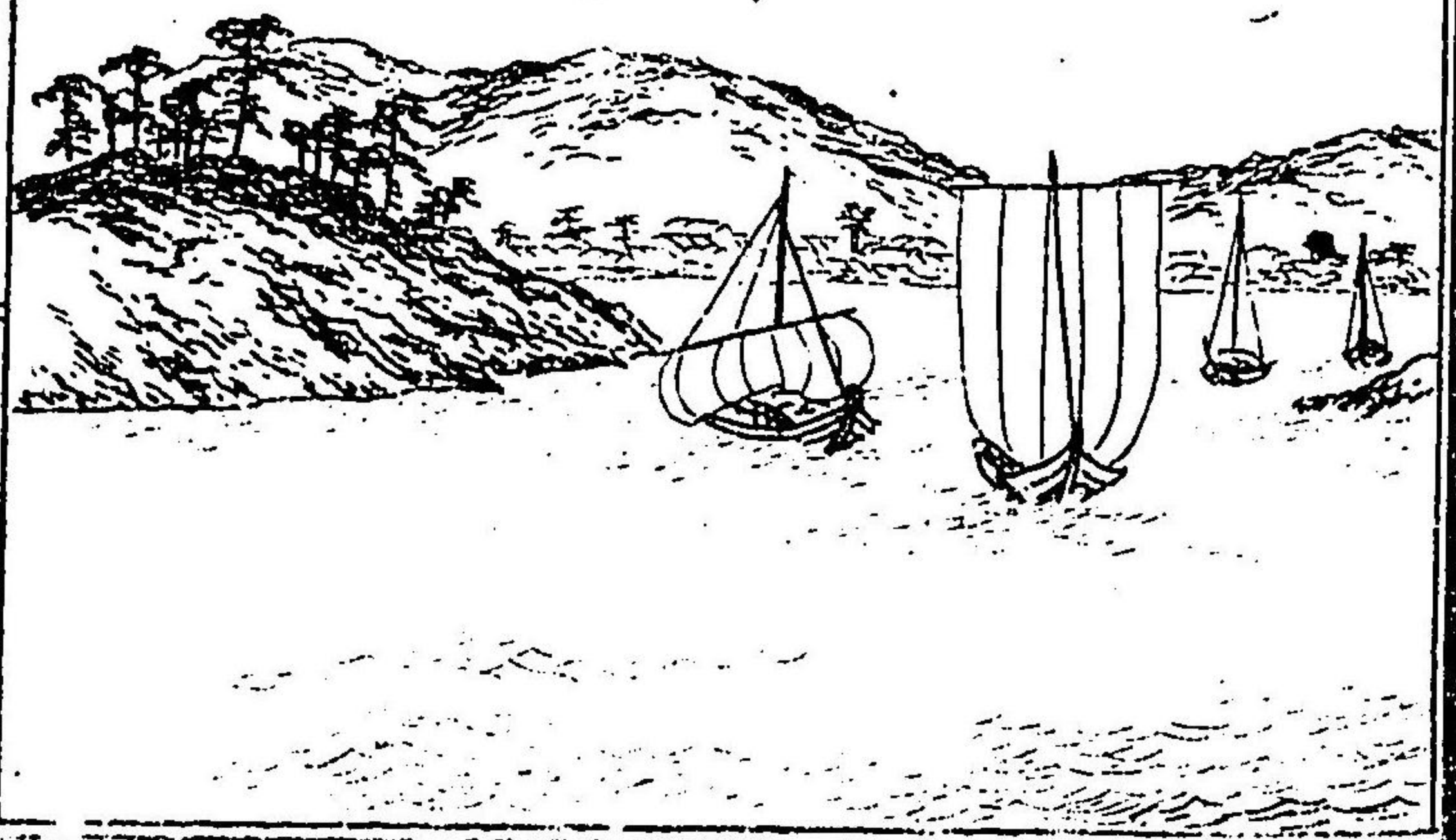
持上君の思をよふに、一葉の舟の死を見
 び承く子孫の棲業を樂んや、先王様中
 於て殉死を定と雖も、及れつゝ海潮の湧
 片付の降りともあつたを平りて、屍骸の
 幸を扶ば、蘇明日城を渡り、我が
 於て殉死を遂べ、忠義に死する人の、何
 と不達して、我輩も来らるべし、其の事
 なること、静に思ひ、涙もあはるる、我
 て妻子に別れを告、難果と片付、素らる
 一と、去り、何れも子細あり、と、領事
 今日を限り、と、用意を備へ、十九日
 舟の刻、むれ八城、父老の法候、士卒を後
 殿、重し別れ、一入城、五、由良、介見
 と、迎へて、と、懐面を以て、事、片、城
 を引渡、年月、浩、法、敏、と、と、と、た、ち
 退ける

清士
 寺城
 離散



大星將告後書

去程、大星由良、助八城と幸、よく引渡
 し、と、我、弟、の、美、士、が、来、り、集、る
 を、見る、は、昨日、まで、七十、余、人、あ、つ、る、が、今日、ま
 まで、五、り、て、長、減、一、百、五、十、人、は、ま、ま、さ、り、け、る
 由、良、と、か、打、笑、い、呼、ば、れ、難、き、世、の、中、ま
 の、為、朝、日、と、侍、に、持、つ、る、徳、を、以、て、我、馬、と
 繁、き、る、と、も、只、ある、さ、れ、ぬ、八、日、の、人、ん、ぞ、う
 一、各、忠、節、と、拙、ん、て、老、母、妻、子、を、顧、に、一、命、と
 美、の、為、に、種、ん、ぜ、ら、る、可、成、激、は、性、と、り、去
 ふ、が、ち、各、長、子、ん、残、り、の、事、も、ふ、く、ん、や、と、座
 中、を、き、つ、と、見、れ、バ、人、と、答、へ、て、中、け、る、八、日、の
 清、一、言、ま、て、切、抜、と、存、浩、ハ、ハ、何、事、も、思、い、金
 む、ふ、く、ん、分、清、ハ、由、良、と、助、八、指、指、園、下、さ、れ、ハ
 へ、と、比、る、肩、衣、を、後、ハ、わ、刀、を、後、ハ、突、込、ん、け、
 老、と、と、く、と、見、て、大、星、小、将、一、成、て、駕、ま、す



ける八天晴成法心中おんすけまきの巻
 聖を撰と今日まで八口外を若さばれ我各
 は中法をる子柄のれ各ハ如何名いぬいぬや
 信がん残りまはる師直までこそそれ入各今
 日信は殉死を遂るとも亡君の右法憤りを休
 むべくとも覚命死ハ安くして生ハ絶しう
 君の仇ハ共天を載ぎといへり誓く命か
 延し法を以て亡君の等言師直を討て
 て清墓に献し其上まで切腹をさすまいと
 言ふも満足は思死の名ハ子載と懸共
 朽さるべし法は美を若初より思ふと
 法士の心底を斗りしや殉死を以て盟し
 業の如く候と美妾の法まどいあうれども
 各故法んを交せに只今死傷の悔しいと
 りても奉命の申しはハ法法はよなよとい
 信不肖といへども牙を亡し美の思美し

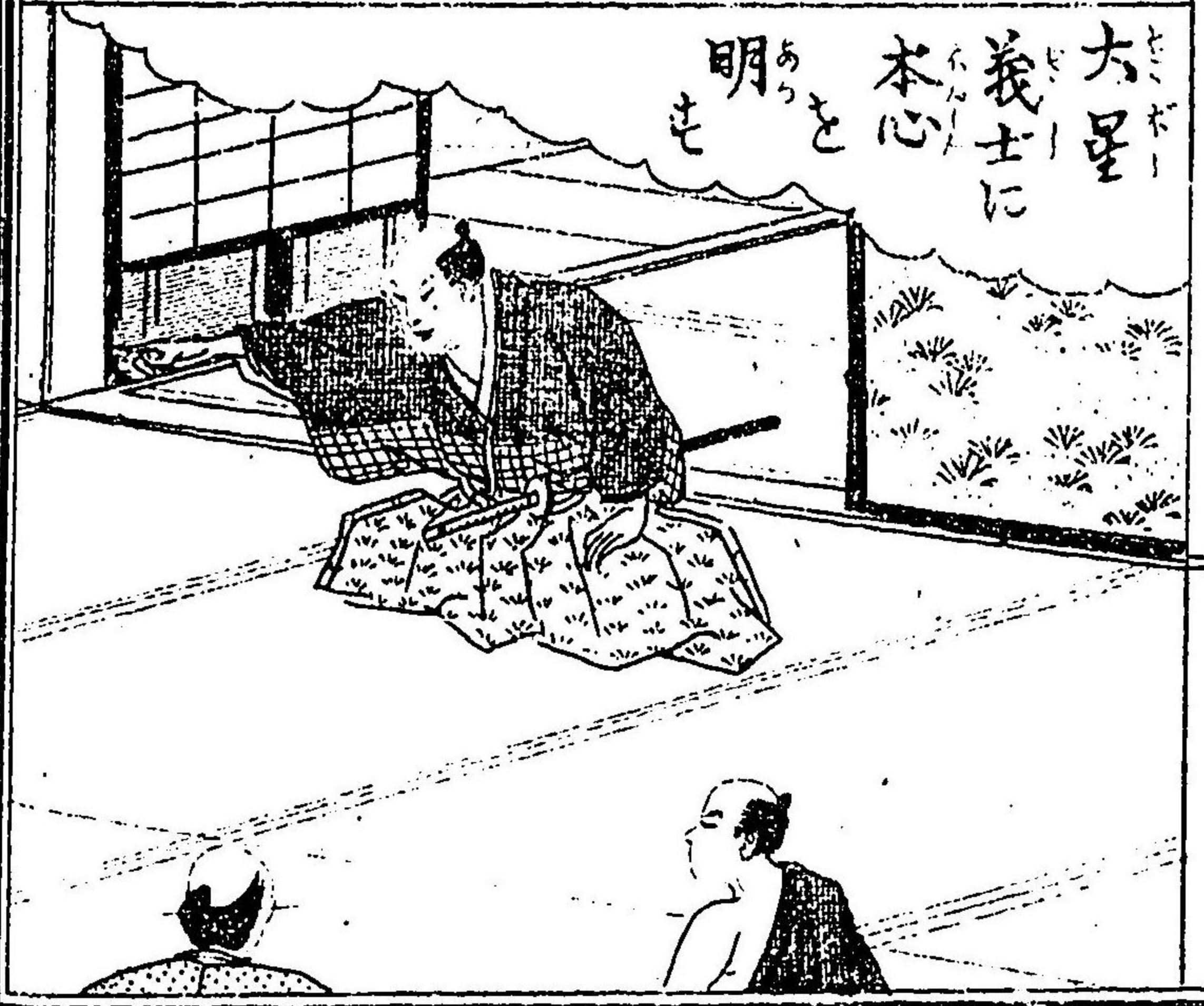


わね奉り不忠の心をあんなやきううと
 美を振ひ舌を碎き法界を細く
 逃げ九一座の忠士を以て悦ぶる限り
 ふく称美んを上げまい誰が牙を安し人
 ま法指をさしれんやとすける時原の
 芳田作左の席を前てすけるハ法とそをうり
 めいおらふ我とともは美存付れぬとも等
 と後をるの疑きる薪まふ一炭とのと手
 堂の微運を以て當時強威の筆を閉ん
 名づくハ遂へくば美死引さる内は美
 復あらハホぞとさうとも乃ハ法界を
 ハ武名を失はんと席を打て法に大星
 て中け死生命あり故ハ正しく父子
 父死せば子を討てば吾堂のへんも知れ
 れども信今一人二人不足とも志し
 あらハ信も若とも通して我ゆく伍子香



義士 子 告 死 定

楚王の屍は銀打仇を後せりとめしも必
 必ど良將の志をさるるハ万夫を以て一夫の
 べく上下心をとりて上君の恥をさる
 べと強きそめて云けれハ一産の人と云ん
 液を流しハ六條令勢いそ刀極りハ
 破成しても獨夫師直が首を我くら洋
 先は指貫ひて上君はもろもろんと眼をめ
 くらばべららしは審判金く遠慮をす
 と各一紙の起書文を血をそいで物をさ
 大星大きは悦びは上ハ各尚地を去て
 散まらとと洋美をすべ一極那達合田
 片田の士ハ鎌倉にあり故の志を向い
 我くら告知らるるべいと云けれハ三士
 れを令せうらのかのく別れをつけ思ひ
 赤尾をひらきて漂流の才とぞ云ら
 日ける



大星 義士に
 本心を
 明かす

大星去國至山科

海と渡る者ハ松ののり遠きものハ
 のり國家を納る者ハ忠實の後はよ
 されハ大星由良助ハ生性篤直美房
 して政道正しく憐愍の志源けれハ村民
 の徳に依り農民八道と云り流し聖代
 世は遠くと悦び居らば及不慮の事起り
 て法士一同に難敷けれハ大星も赤尾の
 沈田地或ハ金子を以て亡主の修堂を寄
 附し住別とる地を返還し乃て村民大
 刀を寄り道場を建て名残を惜む
 車子の轆を離る思ひをさしけるハ良
 も良辰は袖をひとり人と別れを告
 掉きして遠く後を思れハ孤城むす
 霞の中は雫ハ滄海をきりのいで霞の
 とふり燕在世のまはハ秋は清のとぞ云



と鮮月中に様を叩て泣いし今ハ一葉の小
 松は羽を奪て難波より原野を渡りて
 屯る者一天川を渡りて津をよんで登り報
 のきと指揮しそれより宇治田原の辺に
 居るは地田原よりしてるを謀るは使
 悪しと近きが不様よりして山科に移り
 けるは地田原よりしてるを謀るは使
 大とよは頂橋筋の賑ひは美土赤濱
 きれ余をたふはも人目立にも光るの
 と家と未だ見聞のるは居るを立流し
 せとげらるる屋はいてたれとさ一づ
 羽がのちくのるふりとせう一
 やうぶは遺作を赤い花ふんと催して
 永く安法の要を斗り回をくと未だ百
 年の財へとそふりよける

大聖父子繪金夫

爰は大聖九太夫八岡島が悪言し怖る子
 の係が家より逃入才をいむ婿子芝郎
 ハ何下ともまじく逃進いり大聖の津は昔
 年石仕いり若商人と成て居り一と幸
 ひは彼方より存りといへともそとくはあ
 いてまぬれがよもてふりければ定九郎大
 怒り汝我に仕へを以て去月まで八門あ
 未つておぞ再拜と云に我今期成りしを
 見あふどり不扶扱なるはそを後同のる
 なりと散くは匂りければ事主打笑ひ今考
 るるは源切之知りたははどやは後赤尾の
 法士方より法父子を存扱を事法を
 げ下は赤産と云はは成憂目や見せま
 ん早にぬりぬと云はは安九郎にあ
 口を塞ぎあふは色青壁め事ま
 扱もせは家と逃去り候り方知らば

二ノ十七



二ノ十七

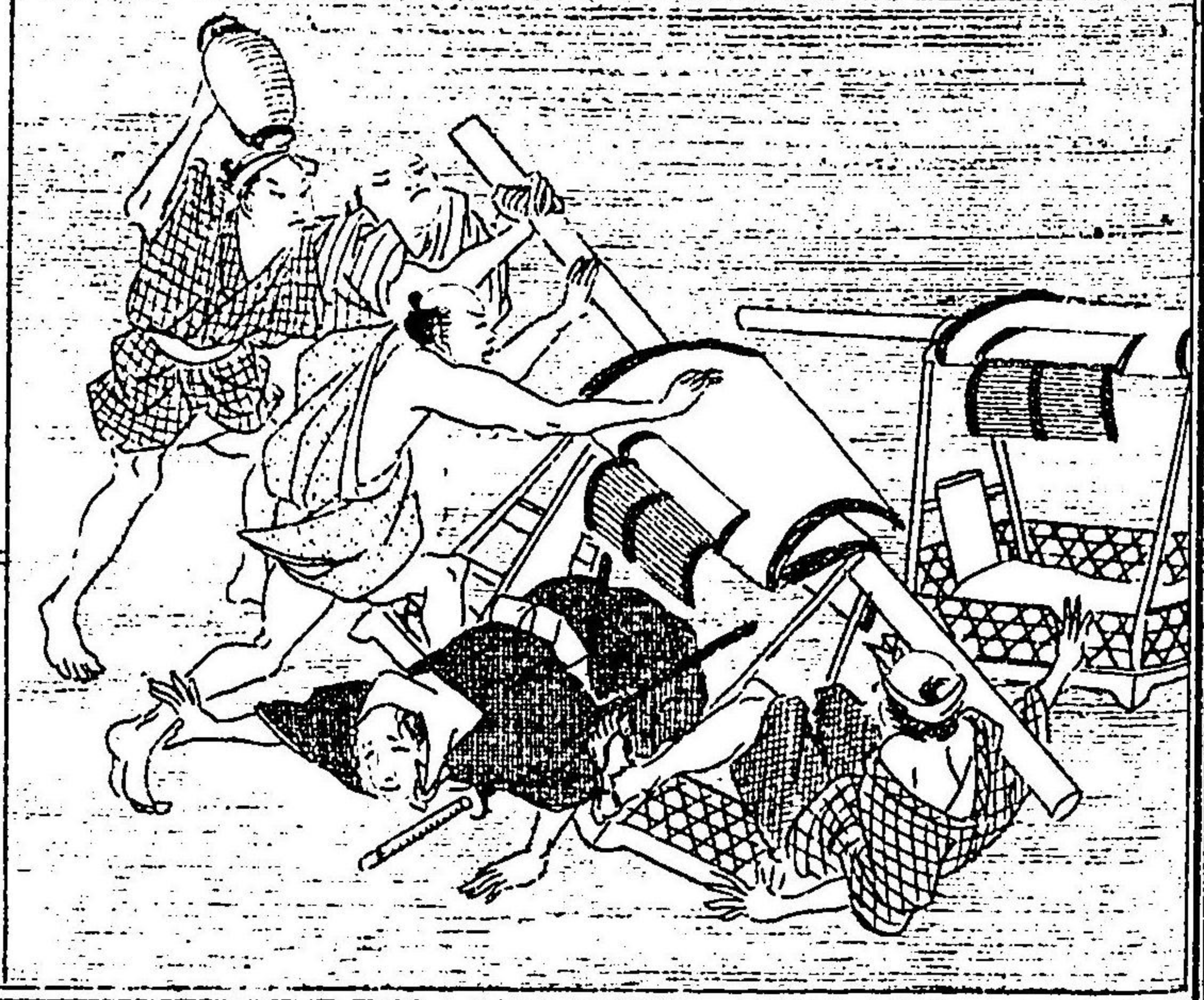
原近次謀余は下向

去程大星田良の村山科に居て同士の志と斗り復讐の密事を斗り馬一七君の嗣を立られんは於てハをやくしとを為し却て不忠なり一旦嗣の成行とんまを後こそ仇を復し腹を切て死んせしめ然りといへも謀余は血氣の若しホ美をたげとて一七トは仇を伐んせしめやまり良難以下の同士下向のおそきを待侘再び上落て事をとんと謀りければ一先老を謀むべしとて九月下旬原郷なる湖田政に形中村訪助をぞ下りける三人の密謀余は着せうバ鎌余の三士大い悦び原が旅着り来りて堀部安去衛中けるハ我々由良助の指揮を更尚地ありて故を伺ふは危し毎一日も早く大星氏を討下り来らせし事を

其二



定度といふは原湖田中村の三人大い三士が美勇の志を威しける時原郷中けるハ大星氏を初め我々をよまはつても大美をかくるまでハ誓之なり然りとはいへども先有者幸は謀りてハ密謀は絶つて由良助亦存まればいければ堀部中けるハ上方の元中ハ故を目紀に見たまふ事云ふハ堀部もふふふハ我々ハ動もをれハ故を目紀に見るゆゑハ一日を過さず三秋のまじり美仇家と夢あはハ術を當とも蓋ふはあつく清運の中は策を定め一判も早く師直が首を亡君の法儀は傳へるとと齒を喰ふハ美を激しむ法士を始郷太田門が美勇は云々をゆより何もかも同日目撃舎美を催しけるは後上方の三士と家と一振き酒着を没て饗應鶴が因ハ番官



系譜一神ありて... 起請文をえり... 約しける... 大星が指揮を交款の勤辭を伺ふ... 謙倉芳田仲左衛門... 大いし骨を白く... 時日芳田源三郎... 大將を左とせ... 良雄の赤糸を巻きける

大星越鎌倉

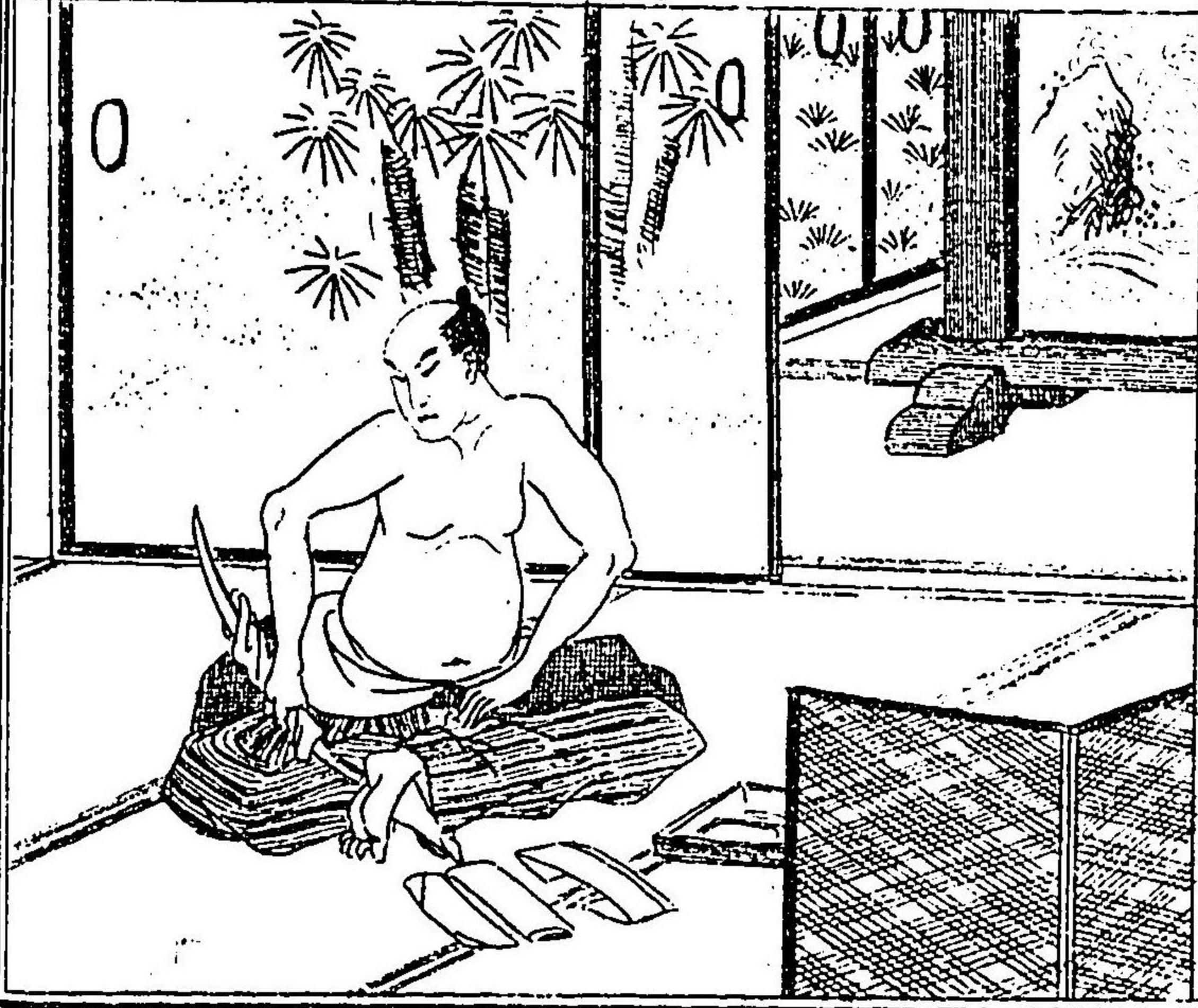
叔も謙倉の使使山科... 通下けれ... 法士の忠義を深く... 心を好ま... 事とあ... たりて肯んと...

三部を中村... 向山科を... 美士ホ大... りて... 免有... 美の... ハ... 起して... 死... 逃... 因長... 妙... 城... て入口...

大星 謙倉 列



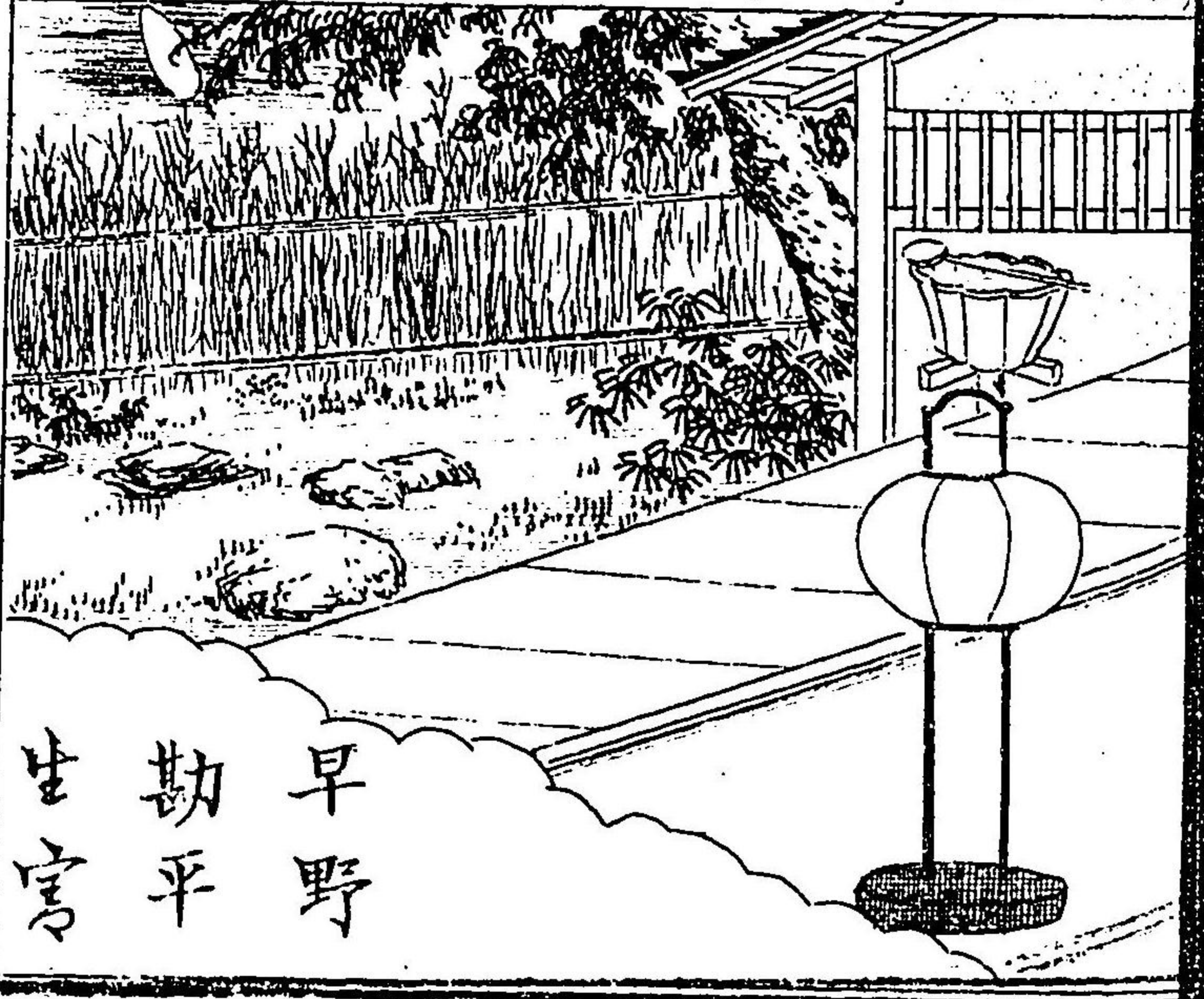
係一末三月と限るすを聞て後より同士の元中や合て志一を去り世共おそき志速を添るすハ七家の再興忠節をよくせんとかきるがゆかり其上世家の徳へ未だかこころは時のむらさるは悶るハるの成まじき務ふれハ時を待たばくらくしいうとちけるハ三士まで中けるハ由良と助友の清ん術忠節を誅す以て難を存存ハども三月と限る其消なきまよもあまば一ツハ七家の一回想も怪れハ末嗣の安否も知れ二ツハ一回天を待たれハ上を養ひてせざるまよもあまはれハ三月中旬と限る志を以て師直を仰ひ天運の至るを待べ月日定ちざる時ハ計なくして志一かこころを押して志を討つて大星も三士がやさるハ不慮ありとはは同しけハ



座中のまよ一同は三月限りて遠く村までと約きゆく湖田中村大高三士は向ひ三月中旬の洛をせりやといハ三士が否三月中旬と云ハあまも三月を限りて四月までりて發足をべとの美之と云湖田中村大高竹藪の勇士悦ぶる限りや一時良雄やけるハは地はあてハ故の若者もんと云ハ各洛意の上ハ務まはるるを押し登るべと各益をそめ悦びの色を執り思ひくは洛場まで取りける

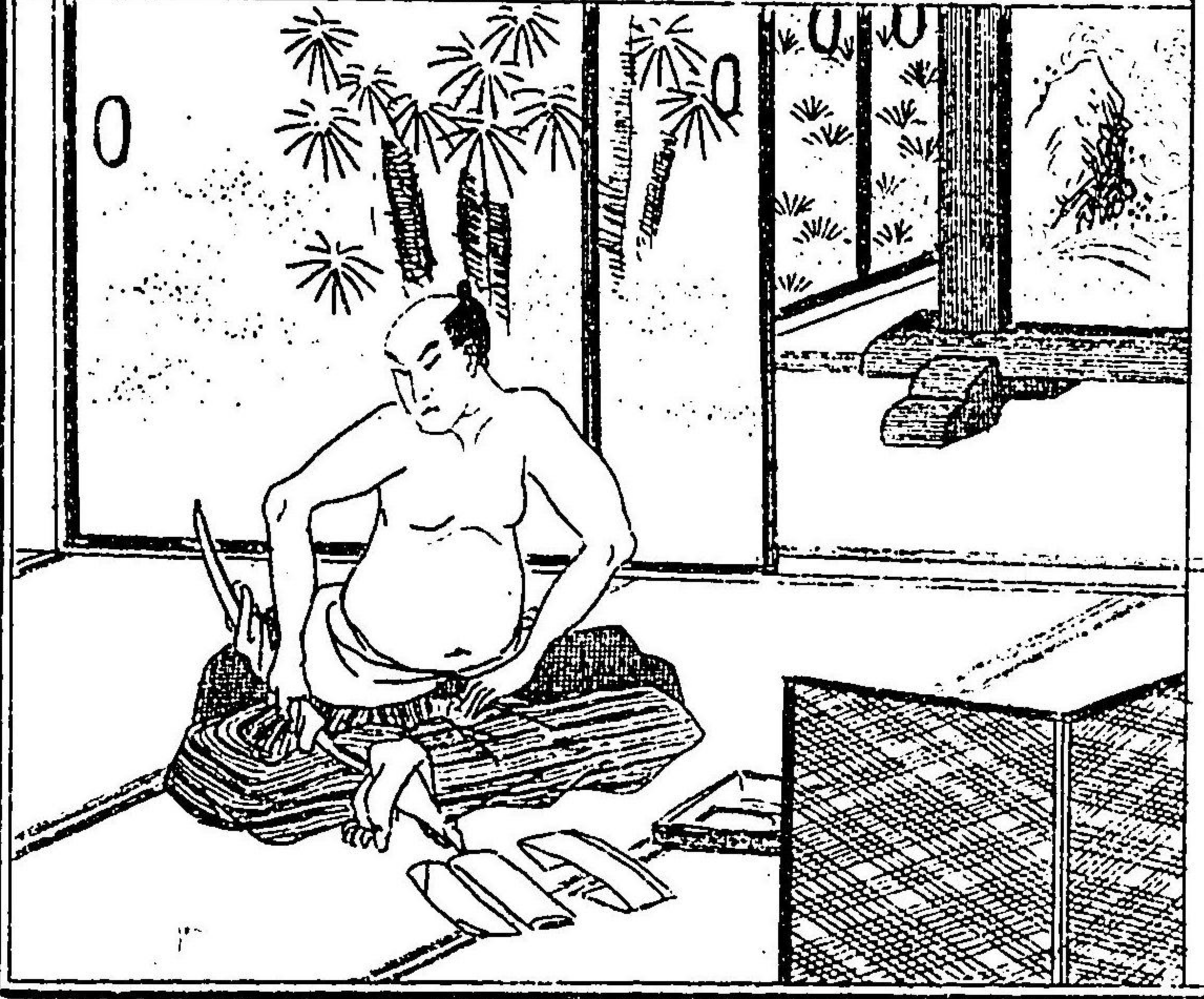
早登助平生客

爰は徳谷の家は早登助平重次ハ揚及まむ村の郷士三本が子之去年三月十四日主君關平の御一番の注進として鎌倉より伯父へ書状をまじり地獄りけるとき早登村ハ沢路の築道成しが古郷の辺りを



早野 勘平 生客

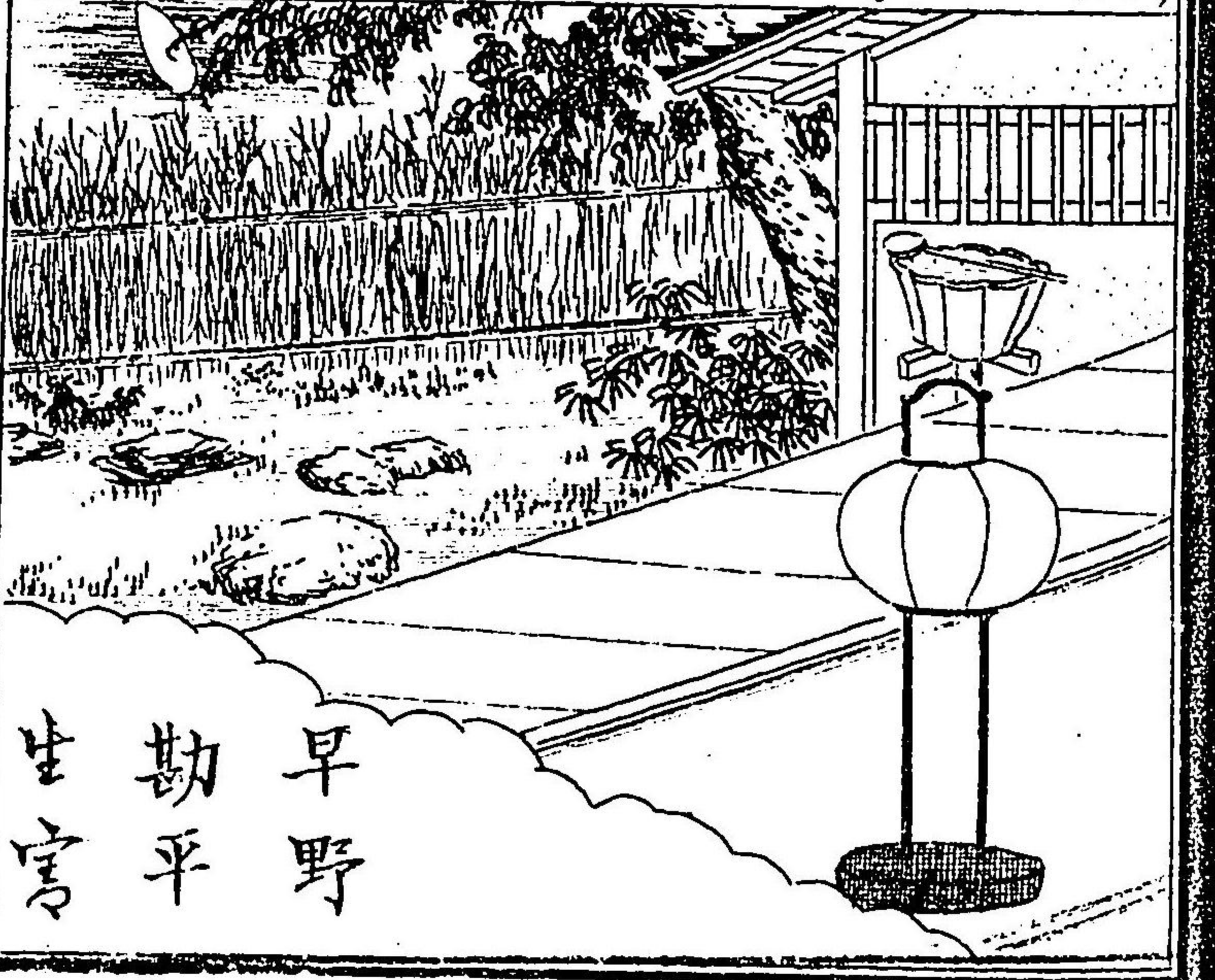
係り来三月と候るを討て後より同士の
 の元中や合て志しをさべり唯其かそま
 表速を添る事ハ七家の再真忠希をよ
 せんと致するが内あり其上等家の信入未
 かしくば討の至らざるは聞るハるの成
 まじき構ふれハ討と待まばくくく
 にとやけのハ三士までやけハ由良と助辰
 の清人形忠彦希美深は以て難を存
 びども三月と候る其消なきまよもあ
 び一ツハ七家の一回忌も怪れハ清人の安
 否も知れ二ツハ一回忌を待たれハ上を
 知はせざるまよもなり北村ハ三月中と候り
 る志を以て師直を信て天運の至るを待
 べり月日を待ち候る時ハ是れなくして志
 ちとるべりと押て志を討清を大星も
 三士がやさるハ不慮ありと之は同じけれハ



在中のまよ一同は三月限りて遠く村を
 べりと約きし湖田中村大高三士は向
 び三月中の治定せりやといハ三士が否
 三月中と云はあきざり三月を限りて四月
 までりて發足をべりと云ふこと云湖田中
 村大高竹家の勇士は三月限りて討
 良雄やけるハ此地はあてハ敵の居るも
 もとより各治定の上ハ務まはるる
 押付登るべりと各益をそめ候じの色を
 勤しむはくは洛陽まで取りける

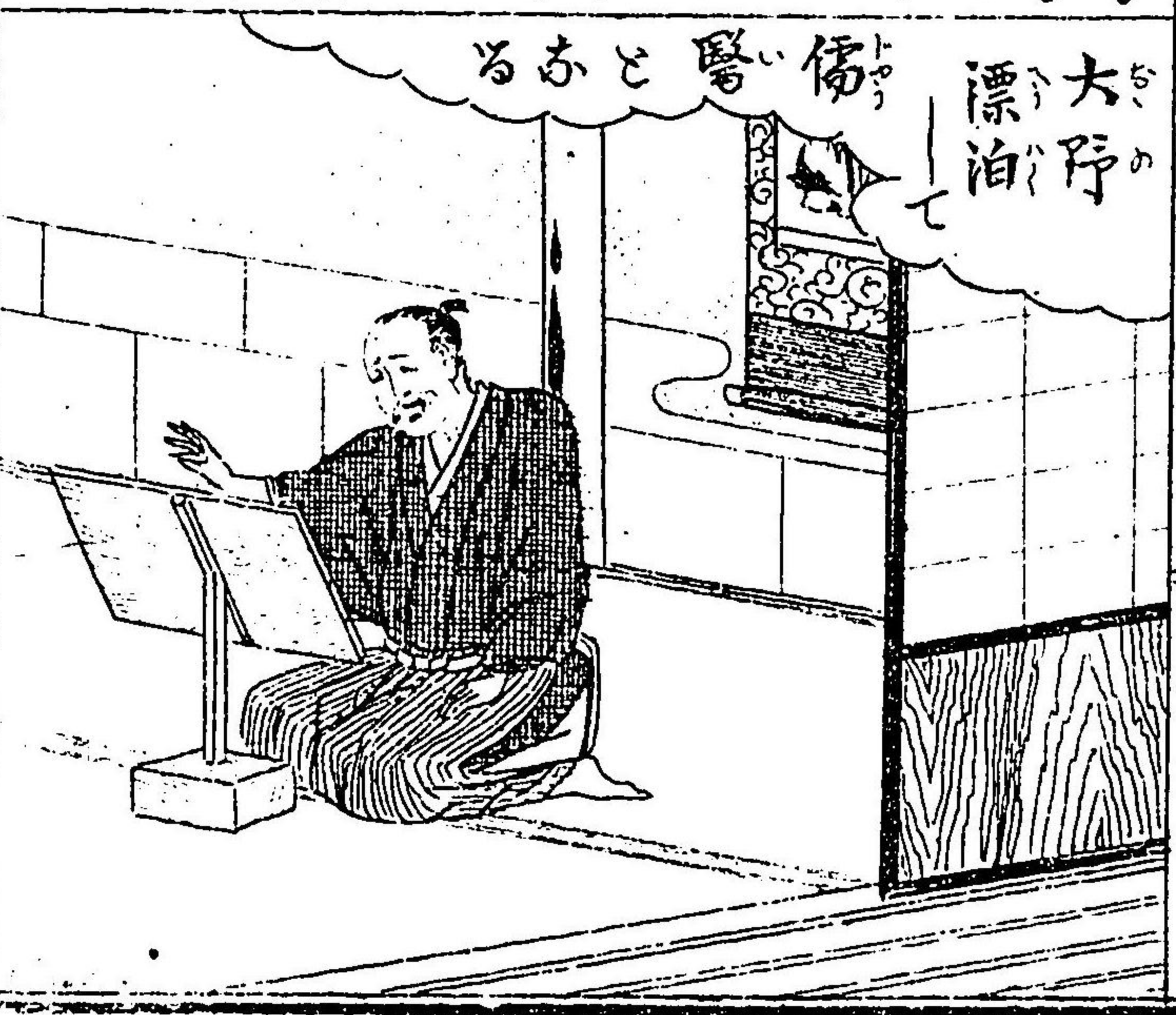
早野勘平生害

爰は榎谷の家長早野勘平至次ハ掃及
 理村の郷士三本らの子に去年三月十四日
 主君御幸の御一番の注進として鎌倉
 り伯父へ書状をまじりて池畔りけるとき
 早野村ハ沢路の築道成しが古郷の辺りを



早野 勘平 生害

池通る道にて葬棄る行逢主次尾を冠る
 我親族なりし馬の上より見しを尋る
 三左衛門が家候涙まぐれて主次が母の
 才まうりし車をはげせんバ流石の幼平十
 方よくれ時守天成らふ命なりらま主君
 の凶夢し手足を失ま其るをほげんとめ
 本國に在る道にて母又死して其葬は遠
 するやと悲歎の後まぐれけるが車あなれ
 ば立なぐり父三左衛門は凶夢を知らせまぐ
 り赤尾は池下りて復讐の明付を成し
 冥株の後母の屋中へれば古郷に里村
 有りて母の中腰を守りけるまで
 義士遊と鎌倉へ下向のよりわくせいのこ
 ち於て幼平父は向ひ私美回冬以来吉備
 等ともと中法一近と鎌倉は越再び仕
 官を求めんと存れるは時暇あるべしと中



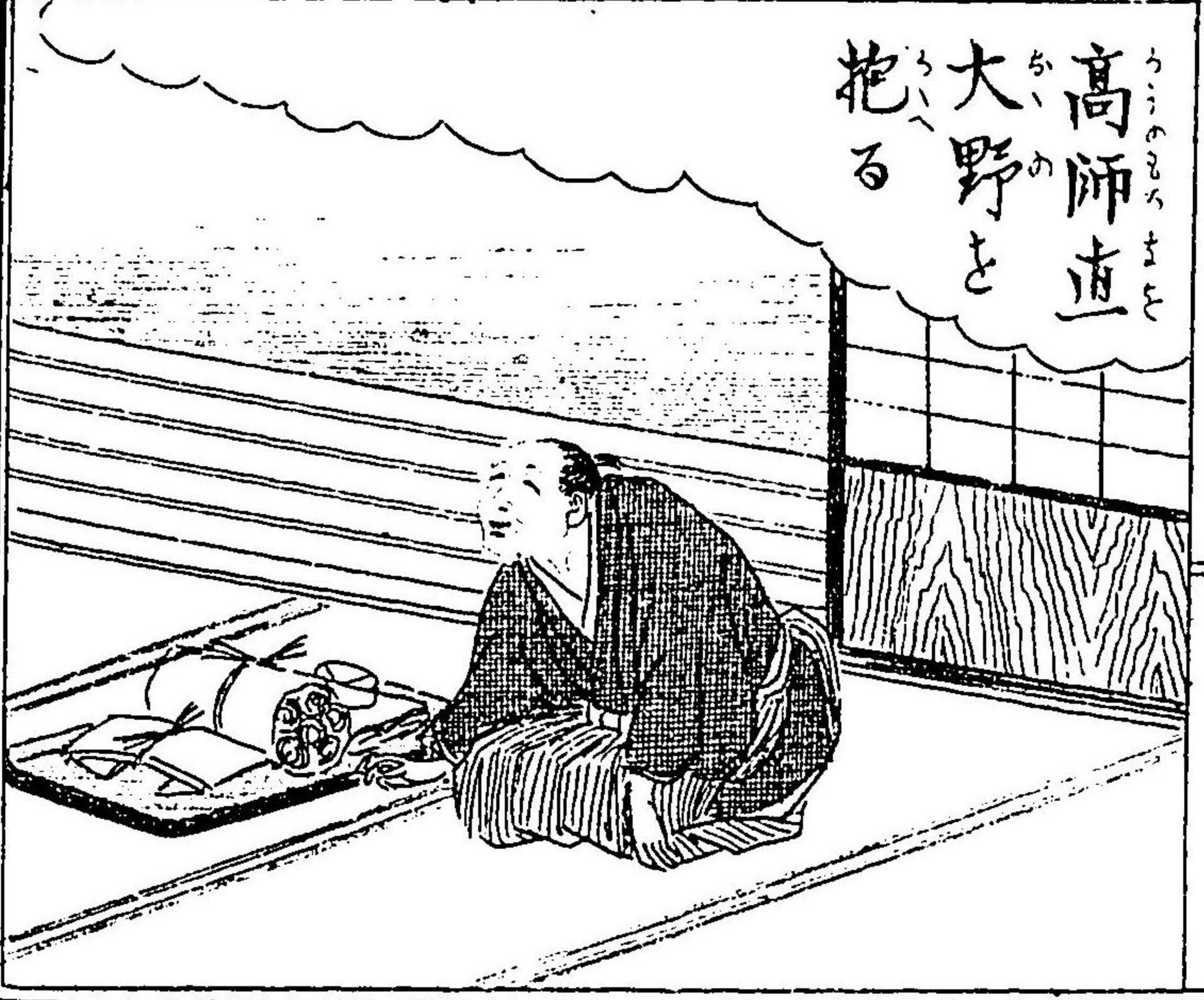
けれ父三左衛門を咬て汝が頼むる車
 ぶぐ我も次身は老居して妻は別れん
 細く思ふ材希なれば公のぞきをやめて
 獨りの親を見届父が送田と得て世儘を
 なれば二君は仕へて不忠不孝を爰は留
 り我を助けまば忠孝ともはばつらるべしと
 理をついで止めれば幼平は思ひ振父の
 宣ふ如く今縁となりとまはさざりし後り
 なく思ひぬん来より我は志し五るを知り
 むんはれバ彩とめあふも理まり父への孝君へ
 の忠何を捨何れをえらん今後等と告ごと
 ち車り留めぬいへまされども我神父を以て
 人は世をまじと望しれば候令世して鎌倉は
 下る道とせも世を死んはハあうりと思ひ
 げれハ竊に深固に入大屋氏への送書父への
 書密細くと認め元徳十五年正月十四日光



六丈を一期と一言真よりね領しる位園の腰指を以て腰十文字は極切りてぞ伏しとりける老夫何んなく幼平が園に入るまで大ひに敬るきれて書金を漬て幼平が忠義とらんし津逆松場も限りあり初と云へばさやうさねば指擲とらんし表は老死と偽りてぞ葬せり田良之助が宅へ来り至次が送書と返とせよ差おせば大星八重次が書金を見て大に敬るきばしり美士のめんくへ傳へれば各之を惜ぎと云ふふりもれ大星復讐の所ハ彼ら送書を懐しりて執真の志とぞとめりける

師直間未登京お

さればその時言師直ハはな大星ホが赤尾離散の仕秋不忠美よ思は松谷浪人ホが行跡を懐いべりして京大坂赤尾のるへ教十人のる老を絶せ大星が平生の約ひを誓ひ何ひける爰に殊矣惜むべきハ大粒九大夫が所行より悴定九郎と法せよ謙念へ玉りけれとも金銀家財ハ赤尾の町人ハ押へられらるるならんバ現をとおし何があせんといふせいがえより英行源き九大夫絶髪と成り尤安と変名して自侍醫と称して醫學漢訳の表札をおし一苗家の法生を兼ねるべく津市とらまておし見臺叩いて皆けるは娘の娘ハ人も辨舌ましくされけとども尤未我んよ方よれ始末揃ハぞ次女は問ふ人もなけれハ今日を過る短く父子色々といふ夫をめぐり折る師直が士大粒がるをすちち赤尾浪人ホが面を悉く知るされハ大粒父子こそ居るの目明なりと金銀と子へさういけれハ尤未別々の父子は迷はる



のる老を絶せ大星が平生の約ひを誓ひ何ひける爰に殊矣惜むべきハ大粒九大夫が所行より悴定九郎と法せよ謙念へ玉りけれとも金銀家財ハ赤尾の町人ハ押へられらるるならんバ現をとおし何があせんといふせいがえより英行源き九大夫絶髪と成り尤安と変名して自侍醫と称して醫學漢訳の表札をおし一苗家の法生を兼ねるべく津市とらまておし見臺叩いて皆けるは娘の娘ハ人も辨舌ましくされけとども尤未我んよ方よれ始末揃ハぞ次女は問ふ人もなけれハ今日を過る短く父子色々といふ夫をめぐり折る師直が士大粒がるをすちち赤尾浪人ホが面を悉く知るされハ大粒父子こそ居るの目明なりと金銀と子へさういけれハ尤未別々の父子は迷はる

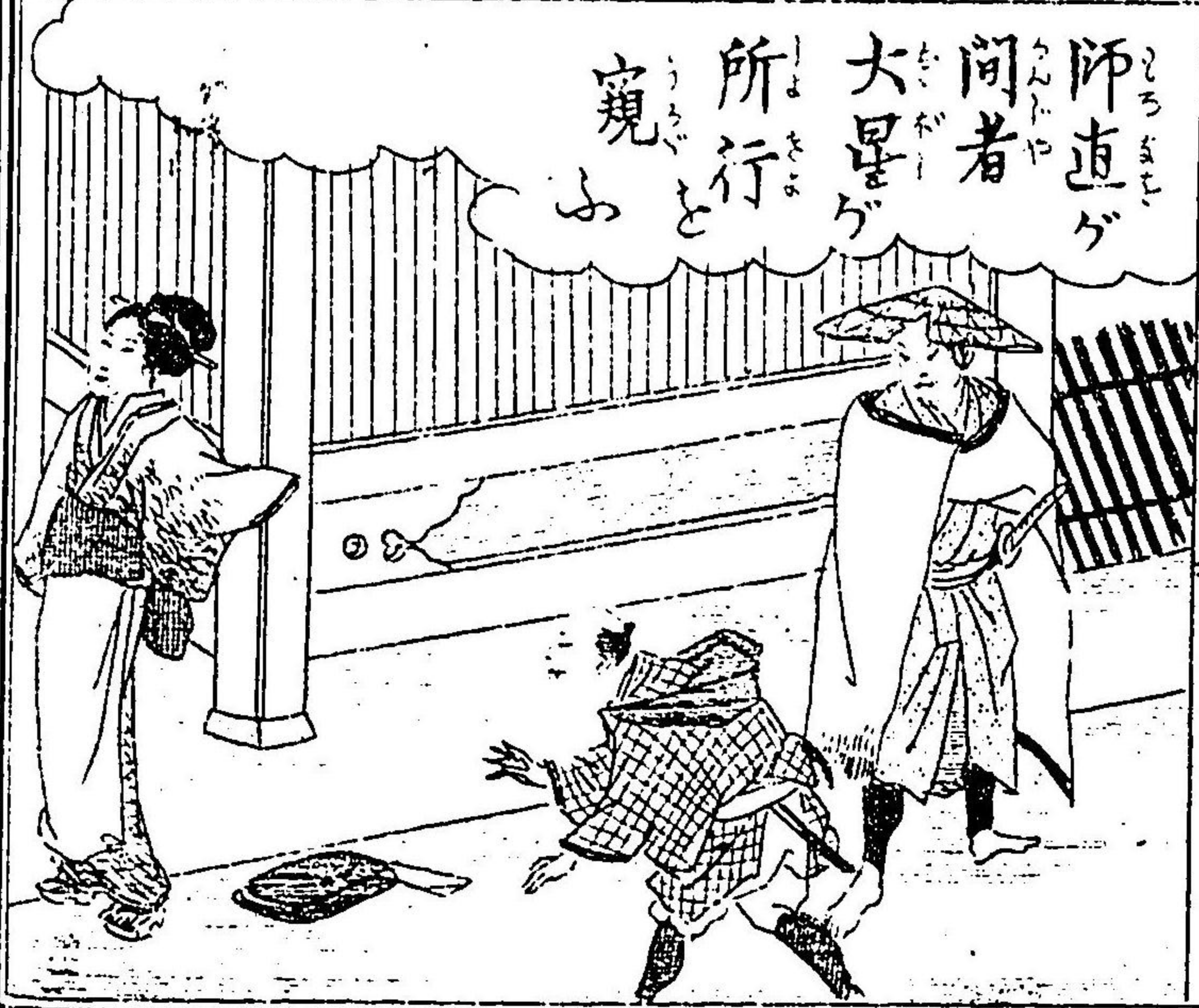


がひ師直がる者とさし京仲り登り大星五
が不れをそ相ひける

大星偽脱棧屋

されはばるる原助助近着源四郎まもつ
付て大星ま告りねバ大星ハ着て移るべと
素一或時八傾園ま才とあ明日もわらぬう
とく、孫人目刺をも得らぞおれを明日
を着し亡者のま日ハ却て目立斗ま居宅
へ奥をを運せ刺さへお子被郎の教い
手お傍ををぬい踊り狂ひ却抵園町
の花婿ま遣ひ僧衣をま一妓女を遣て
町中を徘徊し碎倒れま成りて鼻紙袋
ま落しけるを彼る夫もいらして兵ま居る
ま皆植女被郎のまどもとぞ其形勢
まおがら扱人のわらなり一如之鳥原の棧
君指校屋の柏木太夫ま別産はは木どハ

日教は棧屋に籠り柏木と流るの末を
離れざりしや或は柏木大星まむらひや
けるハ流し不戻美のまよまて移底ま
く逃まるといへども枕並まてまて終ま
寺解るハぬハ流ん中ま色ませぬふるの
五やんと君りれバ由良ま助めてそま
をもトま逃添てよりま末一日片時も忘れ
やらば我君の妻とて思ふやへき不存な
れバ何きを思たべき不五らんや係一んか
のわく病才まして考く不後の色まあ
ハを救幸保養まといへども末刀のま
ふ一元末持性なんバ才を恣にまなまハ快
幸もあらんうとは何へ通ひ一が面白酒
まよま持性を散らばはる流く氣刀まこや
らま光へれて寺解る形もまべりと扶杖
一終ま一夜の情もあざり後無の後



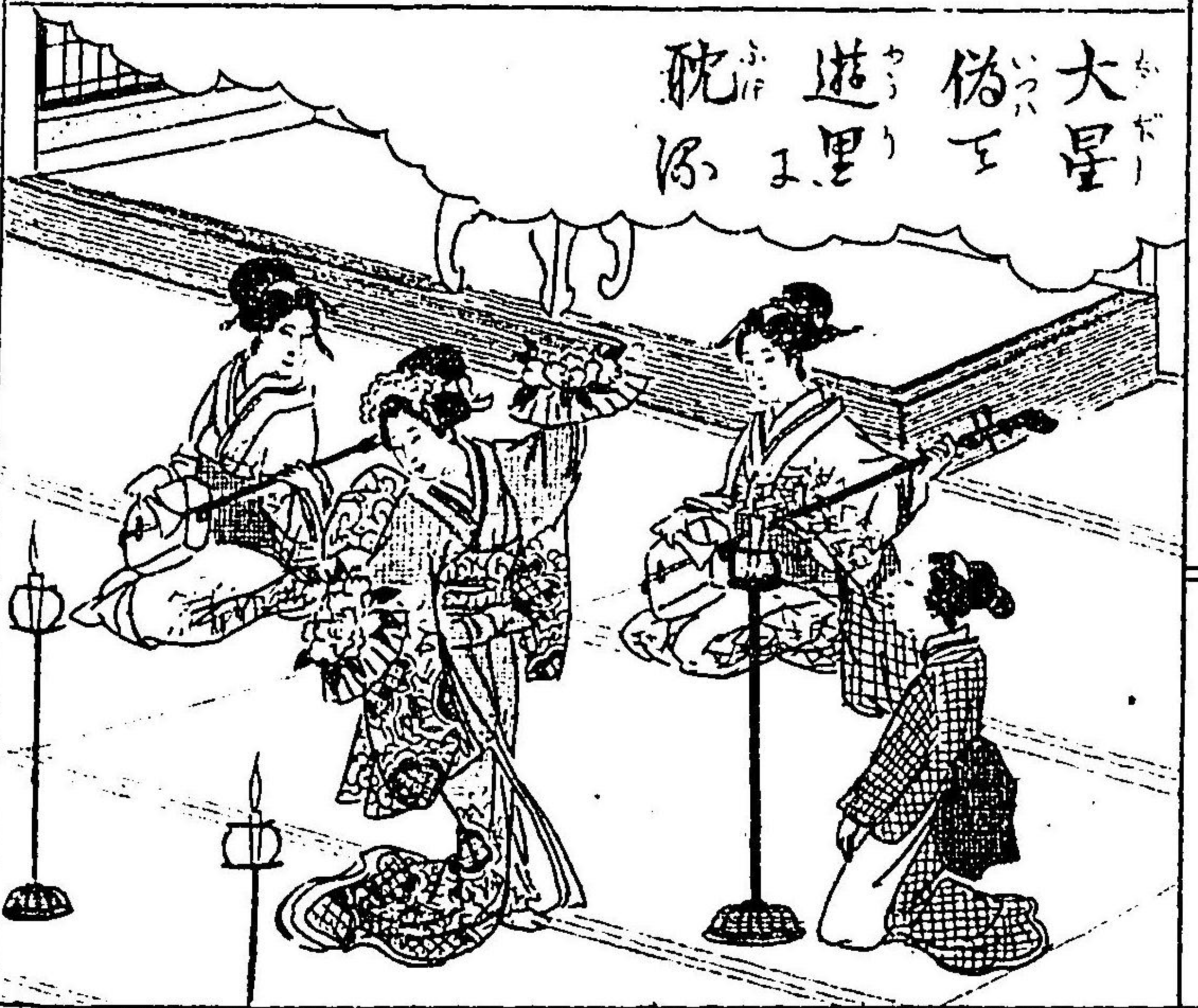
はるるを流りたり大星が中をうらんで
大星亡命の後ハ一塔を築き居りて
乃んでハ自ら墓を築きて精進を志し
客よも遠ざかりこそ精進成る志
なりと彼が情をされハ大星が不義を
忍び近者源四郎小山借五左衛門等
お淡とふし良雄ハ我黨の宿師
り彩る拳勁ありて率々人の指圖成
べけんや元偏は徒托のやなるべとて
おのがん引籠て二條の町の本どり
三文字を一郎ちんが娘種女といへる客色
艶ふるを進めて大星の妻とハ大星ハ
比女を愛し通ふといへどもいまだ推里
の槌ハやまさらけり

大星戲天井楽書

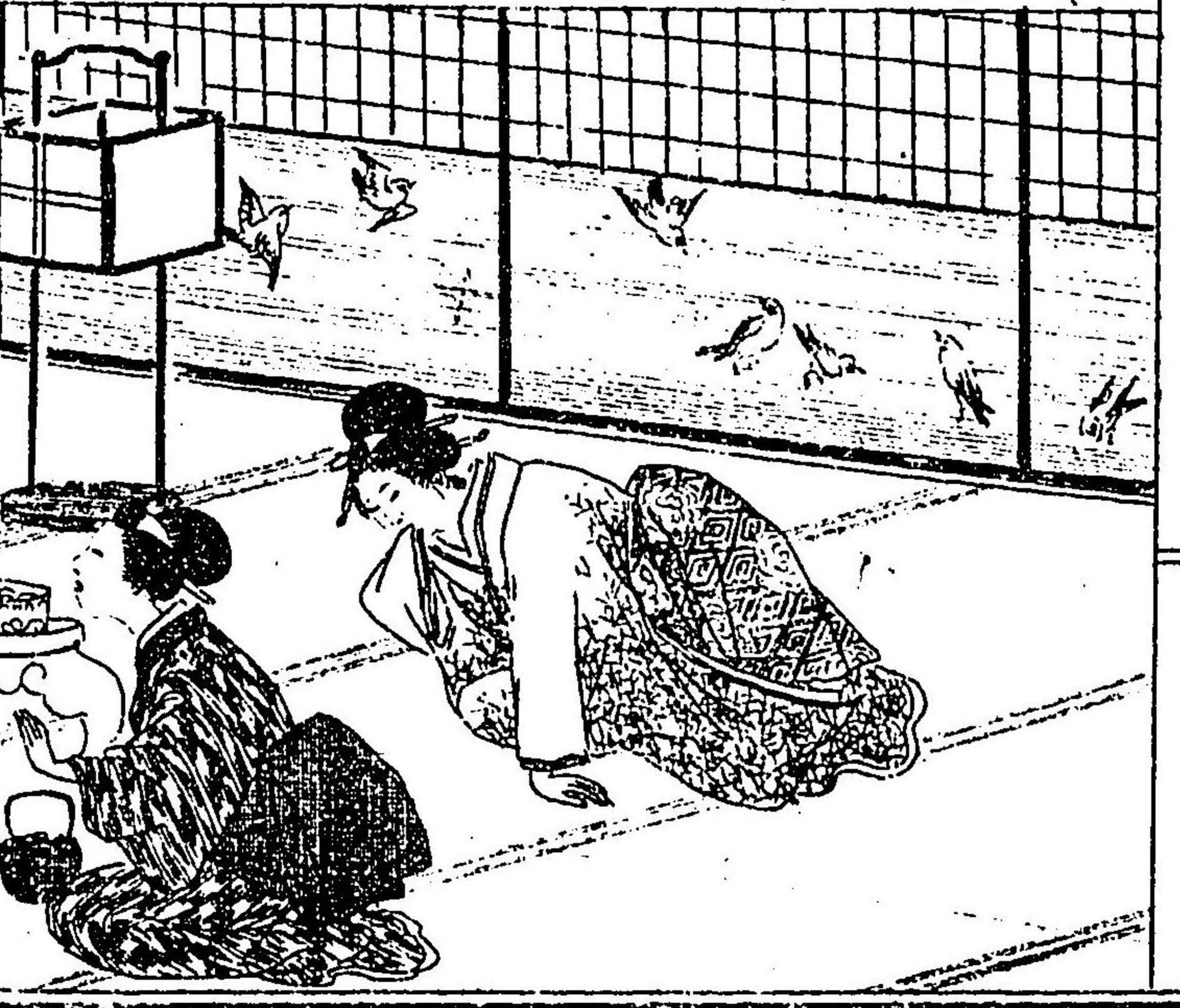
又ハ大星浮と替名して兵竹の伏見の

聖蹟本町は通ひ針屋の浮摺といふ
跡も先なる貌偏は春風一片の花を吹
くはあやまといれ紅粉を奉とせる願
せハ秋のそと軍江の月を吐せる松油
はまきとめるを焼の香ハいり成大徳の祥
仲かりども奉らんを勤ざらんされ由良
と助ハ彼浮摺が頼願はなつと世を
いよ登教のさらいもかく碎し倒れ酒
日余一巻をとりて天井は書今日亦逢
権君過光陰明日如何可憐な君恋袖拂
歸後世人久不許逗留不遇二夜也と衆
書かすけるは師直が若者の若者とも四
五人植下してはと知人は成人やそく合
けるは彼若どもお淡りの次でハハ
許ハ赤尾の家はしてこととまき人
一よりける法者指ハ最早を公左の望

大星 偽王 遊里 耽



之なきやは一清子息も恥あふべしと申
 けるを大星守てあゝ泣りまうのるを人
 りふもや武士の行義はあを果しうらうる
 大星なるらばいふは格成おもしろき目
 は遠いべまや左様ふるやせられども一
 衆のさらいざ一人を破んと大盃を注て引
 交く平て三弦を引きて先と彼流が
 三弦やうとて撥をとりてお命の投布
 して女色酒ハ呑ぬやういざ押くとそ
 り左采ハ吐吐狼藉一ツとしてうらねあり
 さま成りれば彼老若世目と目を見合誅は
 大星固ましく分が行跡兼てす傳へといあ
 んにお違ふれば若夫世もあきれ果す
 ちく一師直方へ通しりれば師直大は安法
 一左こそあわれまハ一旦の血氣よして終志
 一ハ遊びしきものもと夫より月も沈み



大星力称法父

大星力称法父
 兼て奥山義兵六法士の上席なりしが
 老に仁美を候て文武の文は誇り重役
 と云彼無の其入とて一日を送まつき
 腹痛のん起りけ元中を免んと斗し不
 は比大星が色氣は就り一体を幸のる
 よして我利る不先人より大星を
 遂げん不先大星と交を絶よけり
 師直が若老はるをゆて今ハ赤尾の老
 どもかをるは長らばとて皆謙念まそ
 へりけるまは大星が婿力称ふるものハ
 生年十五才より其夫五天は餘り力
 量入は越者一劍術学文を好し其振
 舞長年の夫はおとどれとも未若年の
 る成ハ父も大星を明し若を若士ホガ



大星の
 軽女
 大星の
 親の
 ふる

糸合も他の徳安んるを借り替詞と
 以て後だれハ見を怪るるあへんぞ源
 孫とハ為あつて父が権真は腕とを源
 夏折希ハるは死に味けるホとは或時
 美川氏が筆る能ふる女の画姿を一軸と
 珠は秘蔵して床に掛置りしをカ称
 大は怒り口惜くも士の道を忘れぬ
 な亡君の故を親りよ置置まらうやうの
 掛画をして樂むる是が武士の行跡と
 け画をえてすくは利なき持持土晋の
 縁涙が越表子衣を切裂て君の仇を
 報し画と掛替りり由良と助是を見て
 大まじ怒り兼秘蔵の画をわ何して破り
 しぞとありりれば力称涙を待めぬ口
 惜き法行跡や本國を立退るれれぬ
 形までぞ道の海を振若法世害の汚



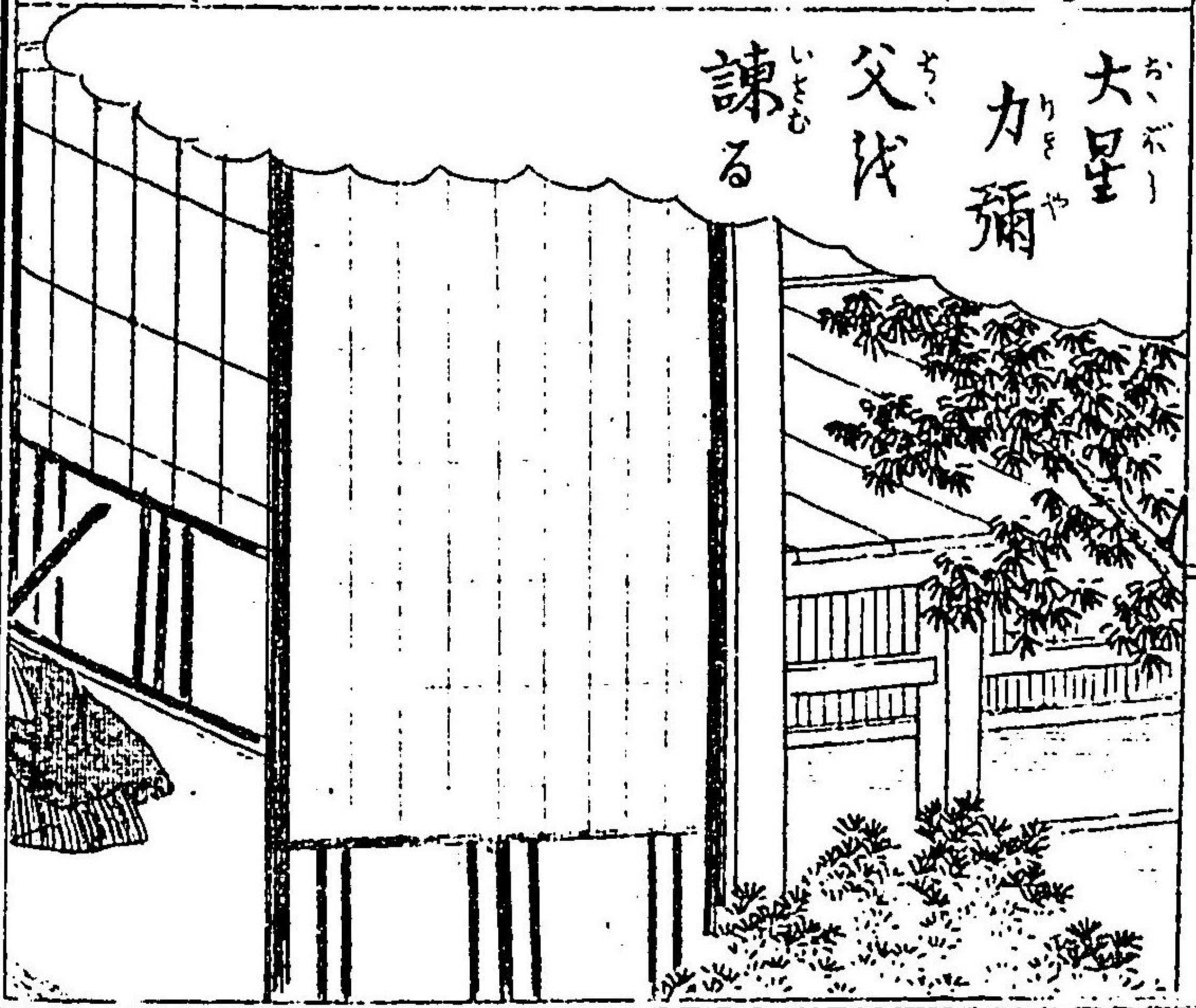
大星 酒興 乗 天 井 樂 書

念少一ハ口惜きと思ふはどやと泣く父を
 凍れハ由良と助らんげれどと怒りの
 姿を奈一ハれざるをやまのうま夫と己
 一智ふべきや父を斬り悔る河不届至極
 云振扇を以て散らま打ければカ称今ハ
 カな泣く一層は入けるを父ハ彼があたり
 ま何とやらん竟来ましく小糸はきて虎
 世知れど上ハ死以て父を誅んと頑
 秀送書を濡れ短刀と己ハ腹は突立
 とを由良と助走入て之を押しめ涙を流
 云けるハねと汝幼年の身として只今の振
 奮らんするは捨し今こそ汝は実を以て
 涙るべしと復讐の中合師直なる老と斗ん
 為熊と放槍の才捨せしを耳を打て
 只今方仇を替る傷へも待べ切年の
 者なれば只今までハ包りり方がある



も厚恩の法まより師直を一刀恨
て涙を報せよ必母は色を見せ
を親成世女入りまへてんわ
の姓名報世の容斗を病は浮りけ
称大は恨ハを給き父の命向く
を法恨や上しゆの勿体ま
義を勵と夫より美士の會候
九バ大星の妻女ハ但馬國の士
女之は木ど良人か下行を見
をうまへ一夫世嘲嘆て忠美
物よ希は臨んでハ金法も廣
極まりハは侍勢来り許しけ
来元来美勇の士成ハ大は怒
去去我娘ハ添せりと使を山
女を先ぬさんと云送大星ハ
妻女よむろい侍勢来り堅紀
入行く云越る

大星
力彌
父
諫る



も程之一度娶りて咎まき
謂九ハまけとど思手細
の百國元へ預け置べ浪人
やと手儀ハ遊てお知るべ
歪ハバ國はゆり父と供見
九バカ称と残り二人の子
馬は下るべとん様く旅の
けるよ千妻女も今ハ力
あるを業くは返古郷へ下
見て始て報仇の志
大星破誓書強弱と様

或時大星つとく思ひ
いへとも我教なも
と波茶をんと一飯
べいと人の強弱を
の去と除き金石の



高源吾破合十都存らんと守て密に珠を
 くめま士を以て美士の面へ中送しけり
 兼て中合せ一俵大差の可なりハ客易
 志遂くしつれ珠は石を抱ひて則望
 が如し各も死分金の可る先いうやう
 ん次第は才上片付諸業を願はるべし
 の血判と切突てぞうへける是を更
 りと抱もあり大差を備へて金石の志
 大に敬まやう小十内が宅にお合
 けりるハ長我が天運を果しり
 とも頼切し大星がんをへりやうは遠交
 なるふ口惜き次大星をたれとて我
 と入道路死せとも師直が首を足せん
 止るも以上山科は立越今一度由良
 存念を以て届け称れを愛するんは



伊勢東
 下
 放
 湯と怒
 女と誰
 せ

今度の血奈り先大星が首を討て其不
 を悉く告せりといふ鎌倉越え師直がや
 志へ切込狂死せんより亦ま一と英雄
 の士中合せ密に山科に至りて大星の對面
 一語との美人を速へて大星がん術の美合
 看れば大星先ひん何れ養けるぞせん引
 凡んとて云けりハ先は残合を以て中送
 通り當時の客体と考る中ハ大星ハ遠
 とく懸まる事仕方ハ中送を遠送
 却て入口より朝られんより一生を来
 善一法墓に永く香花を奉らんことを存
 へと云けれハ小寺面色忽ち愛し怒る眼
 血をそそぎ居大言になりてハ清自分の
 言葉とも覚へ赤尾にて珠を枕とあ
 ささうせん才を清邊が一さし依て美く
 若が命を全して恥をあらわしハいりも眼



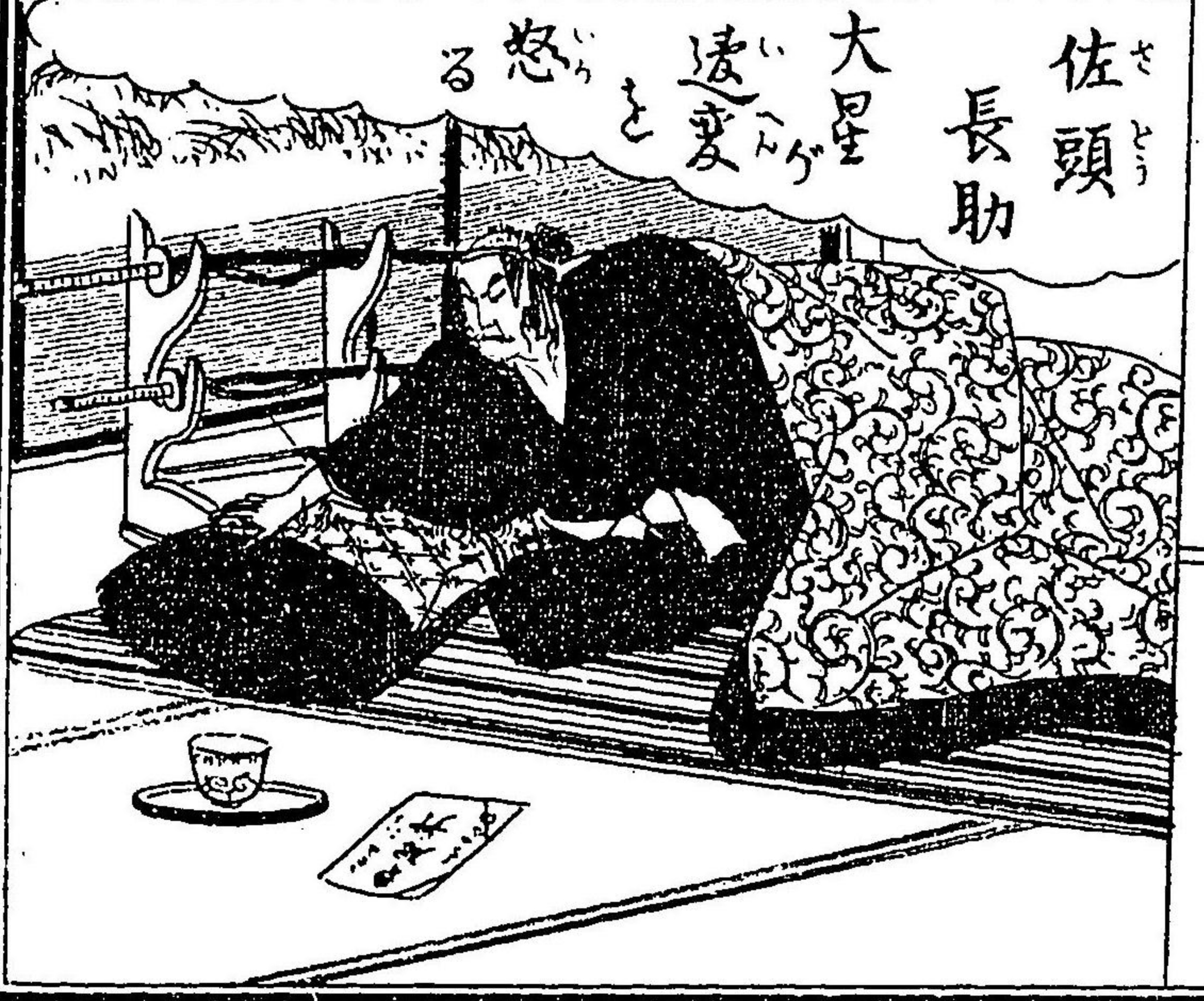
お秀の故を討て七郎の怒りを散らす
 と思ひ、浩く入るや一列の赤ども皆赤
 刃を抹殺と守り兵を口惜くも越真
 は腕り武士の冥加に存する不存の上ハ
 赤刃と差遣へ死して秀は昔奉らんと刀の柄
 手をもりつたれ由良の助は体を見て世
 嫉りげに云々ハ天啓忠義の志うんハ
 かり先中せし一両金く素がふんハあはれ
 月日後り約事はいハ去る赤日ハ一蹴
 も主役の真山をが如き盟を返さるものありて
 勇気表ふる人もやあらんも皆をせり金
 石の徒を集ん為之は赤尾騒散の日より
 森食をたれ凡ハ掃り而ハ激き枕を安ま
 置と様を飽し一本を運せんとなす
 いひき各別んなき上ハ赤たども素ハ胸中
 を疑ひあふるるやれと云二の志を演へけ



れハ実去車も返べきと各安眠をす
 時芳田作左ハ進と出てやけるハ八思
 の為ハ載て思の為ハ忘るハ人となるものハ
 為ハあざむき斗り騒ぎハ人のんまりとハサセ
 とも餘り人の心を不察してハ迷の大切
 戒律ハされハ見ハはらざるものハ命を
 養由が矢先ハうけをを記作ハ忘れハ後
 禁を思ふハ外ハ他事ハすハ我ハ必
 津終有べうらまると吾をむるハ一て中ハ
 大星ハつこと奇笑ハ凍を瞬目の内ハ
 故を謙念のハ拂ハ幸偏ハ各の胸中ハ
 りハ上ハ人と僕ハ謙念ハ下ハ故ハ
 子を伺ハ美士ハ志を成んとハ合
 各山科をぞちまけり
 佐頭長助ハ傳
 去程ハ大源源ハ大星ハ容をを交て近國



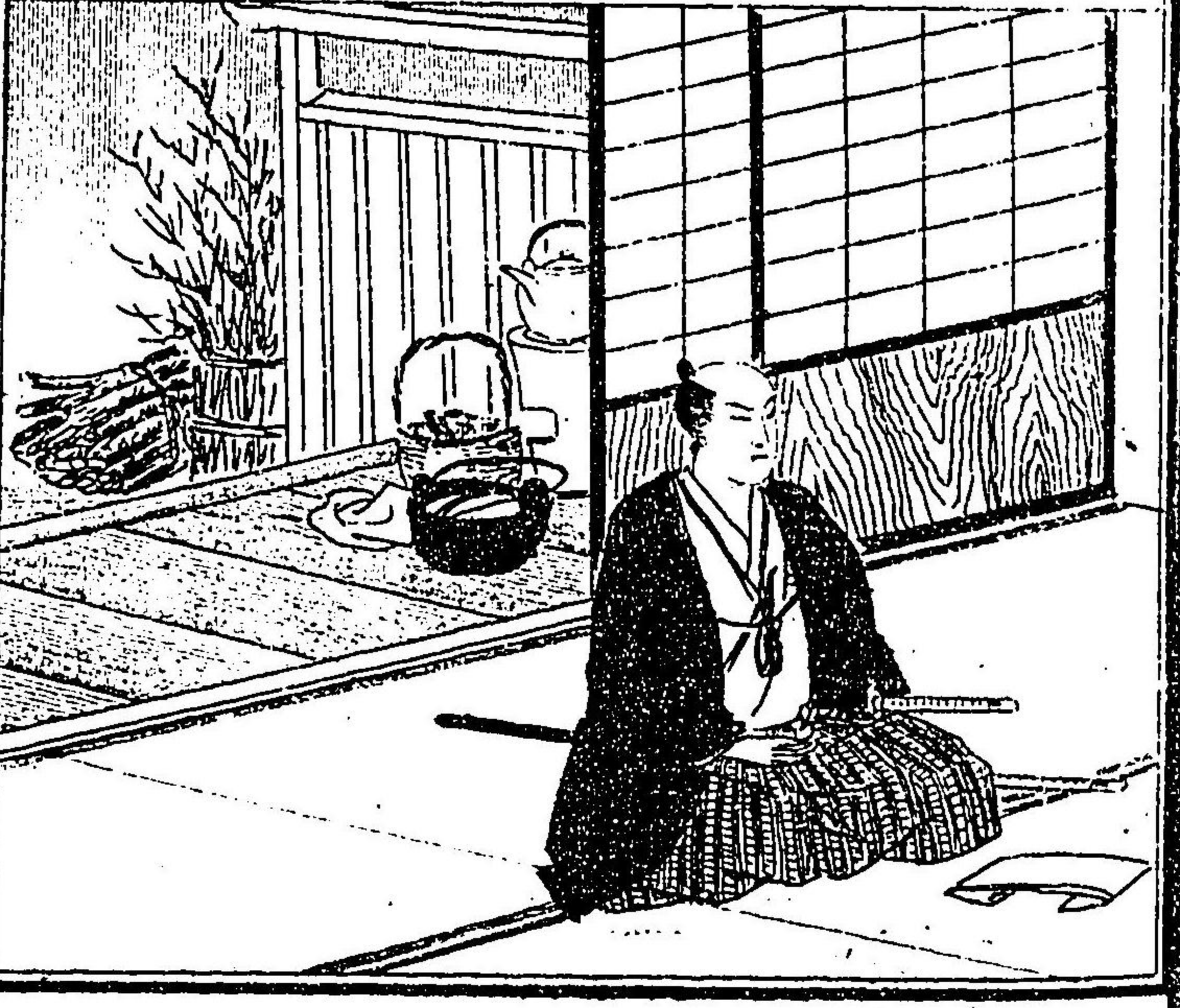
頼り居り士の内へ廻りて秋を死に返しける家も大坂堂島の辺り種田屋本衛が借屋は佐頭長介と云る若長をんと名赤古判官友永が時は赤尾もた方きりて子今の長介家督を候き判官も貞ま仕へ父も替り忠心を候りけるは度凶度も違て浪人へ大星も随て毛助一子子茂七を連れて大坂へ住けるうす寒氣も冒され持病の疾積さし起り打伏て居りし下へ大星源吾長介が表まきよりて大星が口上を演へて秋を戻りけれハ長介之をすて大に怒り病床をがりと起て旬けるハ相と惜き大星が不存式とありん物ながらバなど赤尾まで大星がゆく迹去りたりしや我々が殉死をせめうしく今迄腰後の志をたりし我病はあつたんハ



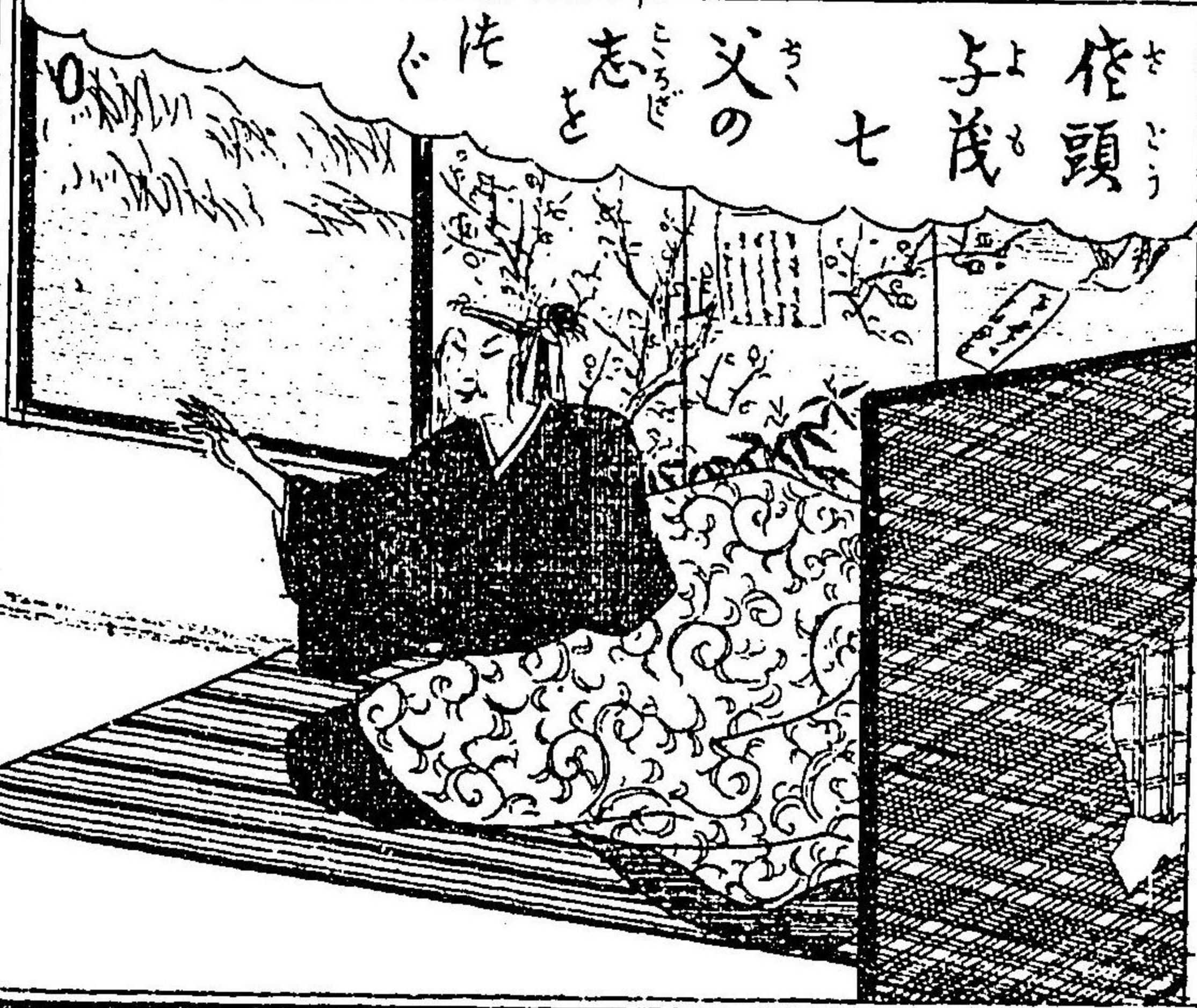
佐頭長助 大星 遠変 怒る

山科へ入り由良し助と差違へて死んぞ物行術自由ささる口惜さよと怒りしハ大星も相と看めそ我ハ爰に一宿をこげれども長介あつたふりやうの使廻る腰後武士替くも我家は置草屋まらばと胸べしと言されど漸よしてそ我ハ長介が宅に滞りひそらは由良し介が容斗を明しけれハ長助も大星も遠斗をらんしは書きをなほ大星とれを文より赤尾をさして下りける

佐頭興茂七の志と續
去程は長介が考れ次第は重りけれハ今ハ覚悟を極めそ子子茂七と云若生年十六戈なるを枕元へ呼び我々の仇師直を二太刀恨んとんハ矢茂はやれとも最早伏気の術をとりは候し死んぞそ口惜けれ去



まらち我忠臣八明ら我八故を討ちかへせ
 ぞして死るは君への中沢八五よりそ方ハ
 未だお屋住の事我ハ未だ家来と云はる
 じ我お果まは何方へ我とも才を考せ
 一生を考むべしと云ければ子茂七はち
 と泣き流しとハ作とも覚へたたとへ都を
 住まはせよ主君は遠ざそ上父が志を
 續けハ武士の道之考の志訓と遠い才
 を退れ汚名を免れと作五ハ云甲斐ま
 き去と居ての事さうん師直くとハ扶株
 三着りたればと踏破らん士の本力い
 けて空くはべきと勇気面は頭れんハ長
 介様いげは枕上徒成一言天晴めんけハ
 れもそ不存五ども汝未だ志考成ハい
 があらんをんを利ん今其方の志
 を守ハ死する世恨もけハ大星と



子茂七の父の志
 子茂七の父の志

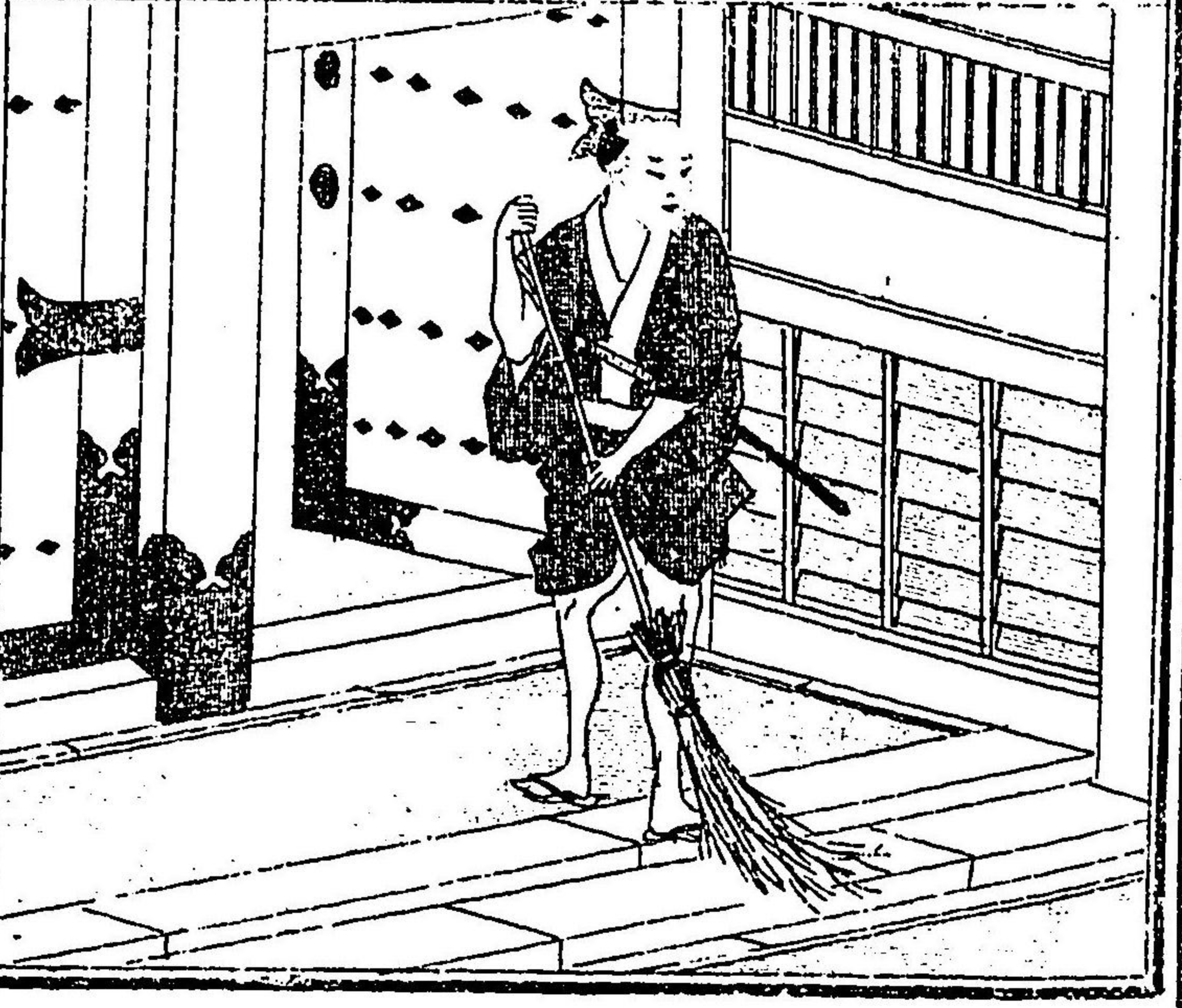
父と只ひ何事も彼仁が下知し後ハ法世
 日本志を違し我存念を賭しけれハ
 九八家傳へる甲冑込之長を志して
 勤けよ不存成ハ未末より勤尚を
 送せし終は空しくお果けの子茂七も
 歎き悲しむと種まき播き浪人の文
 が長病一錢のくくハもまければ家主を
 頼て彼系込を質物と一長介を元直道
 原郷ちんが宅に至りて車の板を捲り山科
 日末て夫をハげと終は美士の列に合ける
 大星密斗子寄下向鎌倉
 去程日大星由良介ハ子考跡五郎を哀
 竊に抜き来け木と京那をよ近國はあ
 る不の法士が別儀を斗り比輝の伎を探
 と堅九八尚地は控て内交の危きよハ
 我憂抱ニツありツハ故本國へ誓ん車



二ツハ謙倉の法士劫刑血気の勇を斬んで
 款を侮りまく車を負し首を得るとも文ら
 る、世只速よるのゆゑとよとを我輩度思ひ
 ても小人教を以本心を遂んる程、計し
 ちざるは絶てざるを果しさば返り討て
 ハ不忠不孝の至極さう、唯幾度も思慮
 して天の附人の私お成百戦百勝の利と
 つて仁義の兵法は計へうとせざる謙倉
 下り車を負んる者を若ぬ離家の近隣
 見ひ姿を愛て彼が秋勢を聞ひて日と我
 己知しとべも秘中の秘なる成ハ遠近
 を推しすたとへ人ハ耻めらるゝる、五世思
 びて事の池んるを肝要とし必人ハ怪まれ
 あふなと深を合ひ九子若老をりやうじ
 やり不謂計策文一字七佛の秘法を以て
 刺存と山科を立て謙倉は若、海部真田

途で計策を伴はぬ、法士の別法を
 斗りて大星は告固根根たる、横川劫刑
 とあめし合せ為人の姿をやつし千尋、英
 濃や若去湯と名を扇子賣と成りて筆家
 の秋勢を仰げ、愛は矢る在りその子重
 太郎と云ハ、松谷凶家の初ハ謙倉はあつて
 本園の梶子を、著し著し殊死の、皆成ハ
 内大だん、本園の士如何成志を、や君の
 憤ハ師直一人は、るれり、款を、棧金大死
 せるハ本を失は、はれり、我叔子ハ、當地
 あつて、何卒款師直を、一犬刀恨んと、柏井
 巻江は、美を、勤むと、鍾元末、脈病の、若とも
 或ハ車を、果さば、矢肩大、まよ、ぬて、赤尾
 は下らんと、おさげ、る、早本、城を、死後、
 藤散の、の、つ、へ、道より、たて、候、今
 ハ叔子、あし、合せて、車を、果さんと、重太郎、

やまなうとい
 夫間兄才
 師直を
 規



煙草賣才をせりて款の起居を伺けり
 度又重太郎が弟新八郎光周の弱冠の時
 他家に仕入居りしが叔父の志を寫し
 思ふ様我才もえて君の禄を承けんと
 れども小児の時委れハ見せし君の
 志や共上叔父と死を俱せんと主人は
 乞て浪人小石の相成り成兄を師直
 門内へ
 立合んと濡れどもは初八月八日
 象の内へ入せんハ空しく月日を送りける去木
 にと岡野浪太の子崎五郎横川勘十郎
 もも人の体も去立日と師直の門あり未
 振子を伺て一が或時路次まで矢野元
 五郎は行合とて道傍の傍に宿を下りし
 越方の地母を耳を病下を明して別
 手杖矢野元身子崎が宿下は未り今日
 与さき舟入は違ふとそそり縁をせぬ

千崎五郎



かり又さるる通りも人と成て彼が門前を
 伺し許りも形を愛てうの門前を能相
 せしれいせし我志と同うん我と弟直を
 やり何卒師直は近付一太刀恨きて亡君の
 情懐を休めなるとも月日を送りぬと怒り
 の眼は涙を浮かめけりけりハ初五郎矢野元
 身が後傑を大さるんハ初五郎云けるハ初
 津親子だと相察冷が扇を振ふとも津親
 大樹を動かさぬ本意を遂る事
 は度大星を嫁め子刀の筆一末の傍に米を
 ぐり津を承けし津を伺て師直が首を
 幸を願ふ津直馬は加り候本意を遂
 ると叫びハ矢野元ハ播磨一陽未後の時
 子苗り天上より外るんして大は必じ日比
 の戦い馬は初五郎は亡君の我がまを以て



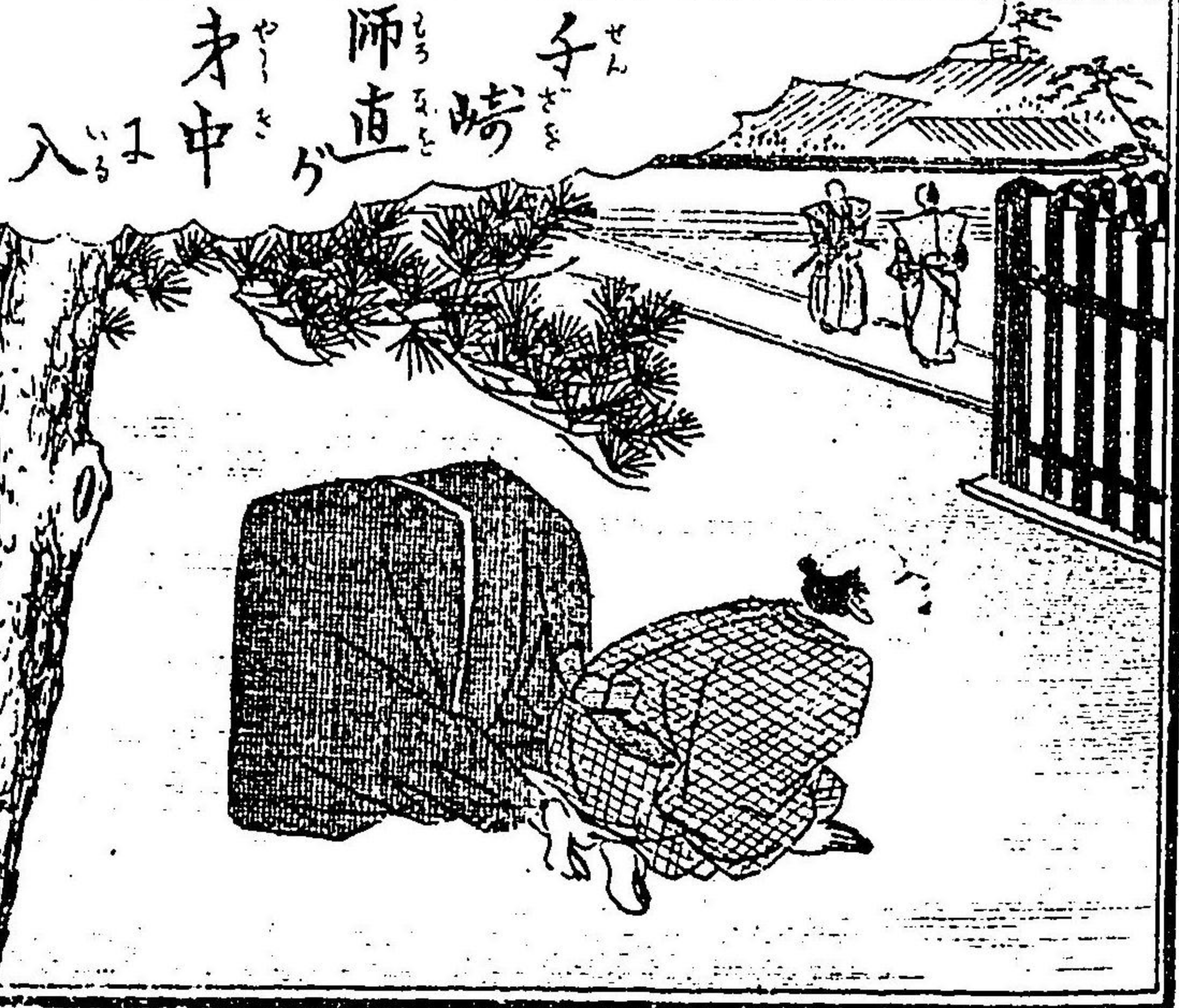
引合め成下と血をそそぎ美士の烈まがなる
千崎称五郎傳

と九六太皇由良助其器を撰と藤金下下
ける子寄称五郎八生賞博學と云武勇と
云誠よき美は徳なる者之父八美佐の大字
仕へて更佐を稱し千寄又市といふ者の子
之美佐の徳は依て又市浪人と成称五郎と
連て同國勝田と云下は住けるが称五郎十三
尤の時小鼓を好し同年の後美佐十三郎と
云る童と津山の城下は師の五ヶ九八歳は
い通ひいふは其下の町人は腕立する者
云る大いふ不敏の道れ老臣彼美佐の美男
なつと材ふれ美はあてふはむれれども美
作の美佐は美七太は怒り彼を津山は通ひ
待伏しは美佐を教せんといふがむれども
美佐十三郎は美七太と連て津山の市中を



通りを走らせ七尺付思ひ掛まく後より十三郎
肩先を刺殺す下を走退んとまじしを称五郎
時は十三丈遠尺かして見を遣うけ人を欺
切敷逃走る比真者と偽返せば美七太きい
うり小室の分際まで比真者と八車可突いて
汝もけ世の嘆きやんとぞて後し称五郎目
無切付る称五郎假と替し戦ひいふ怒り
七き切殺し十三郎を看まらけて後しハ誠
肩を刺殺し入るは勇名四方は吹入子
伯又よ来りしを塙谷家より懸望して
されざる具のんは叶ひ教く支才一常一
は候し忠美金沢の老成はは度々の企も
懐んをきせに藤金下下り根経餘人は過
をしちまのちかひいよける

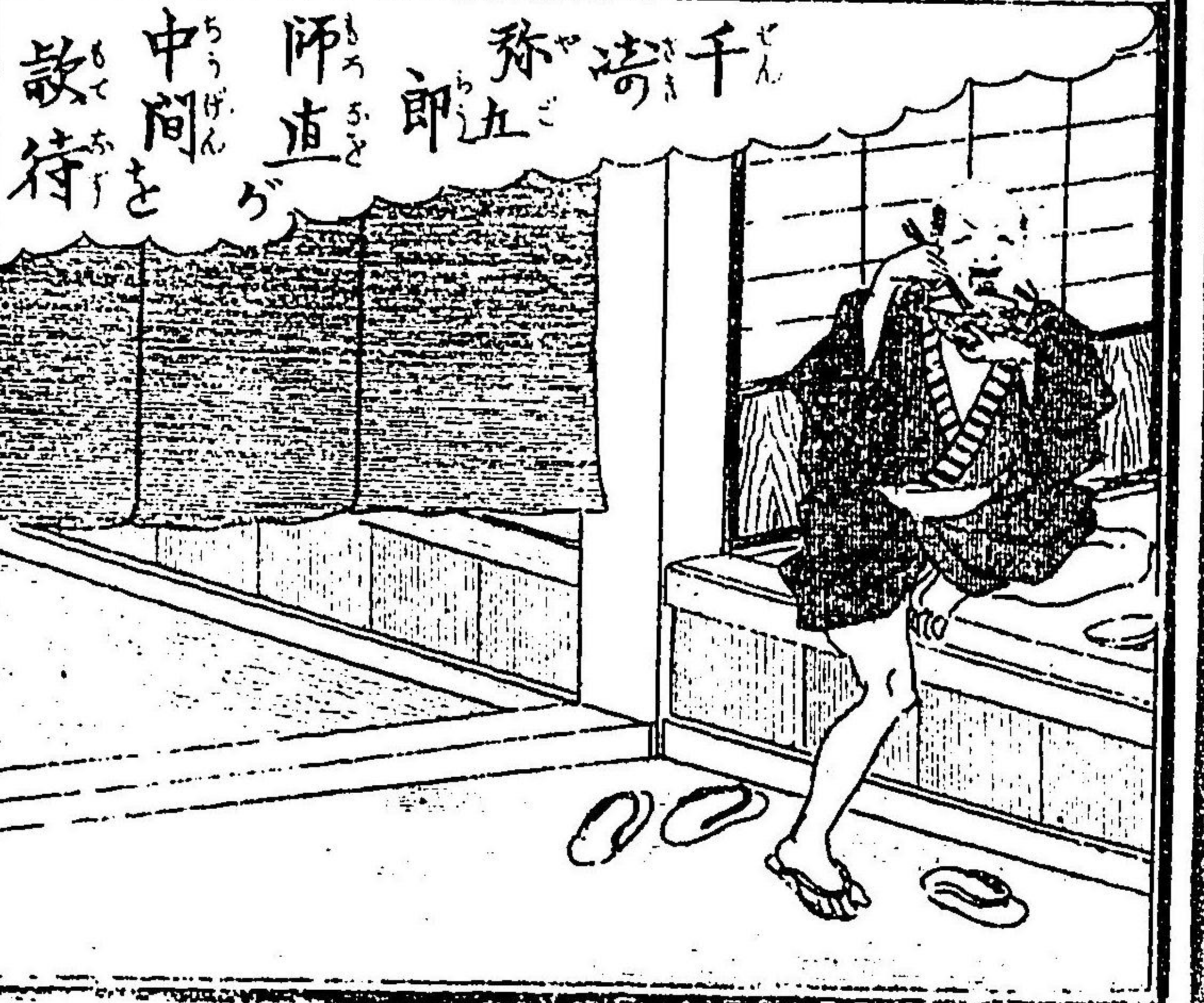
子寄入師直才中
美日すの氏八衰門お月若五子を子寄



五郎坂部と法いて老ま枝り小山堂
 と改子場次を湯田野浪ちり松堂丸五郎
 下人ふやつき片蒸ハ酒片布ハ扇子小る物
 着ひ替の宿中を伺てけれども用人者夜夜
 秋番士を定て守らぬ客易出入を免せれ
 立入て本の外敷を歩るてあへんハせりハ
 良解りしを伺ひ称五郎小る物を比赤ひ赤
 入て長巻の廻りま御細せしが番士もこ
 付役は不ハ如伺て入入りやと替けれハ
 然と才を震し私ハ裏門あは小る物あは
 人之津用事ハ海馬系りれと入入てやけれ
 番士も兼て門あはて見入候或ハせまで煙
 き共よもぬせれども子細五ては屋敷ハ御
 用達一の外有人を禁しあは夫を御
 ぐりま入入事こそ不測法ハは者入事ハ
 羅不成とあうり人を付て門外ハ者さしむ



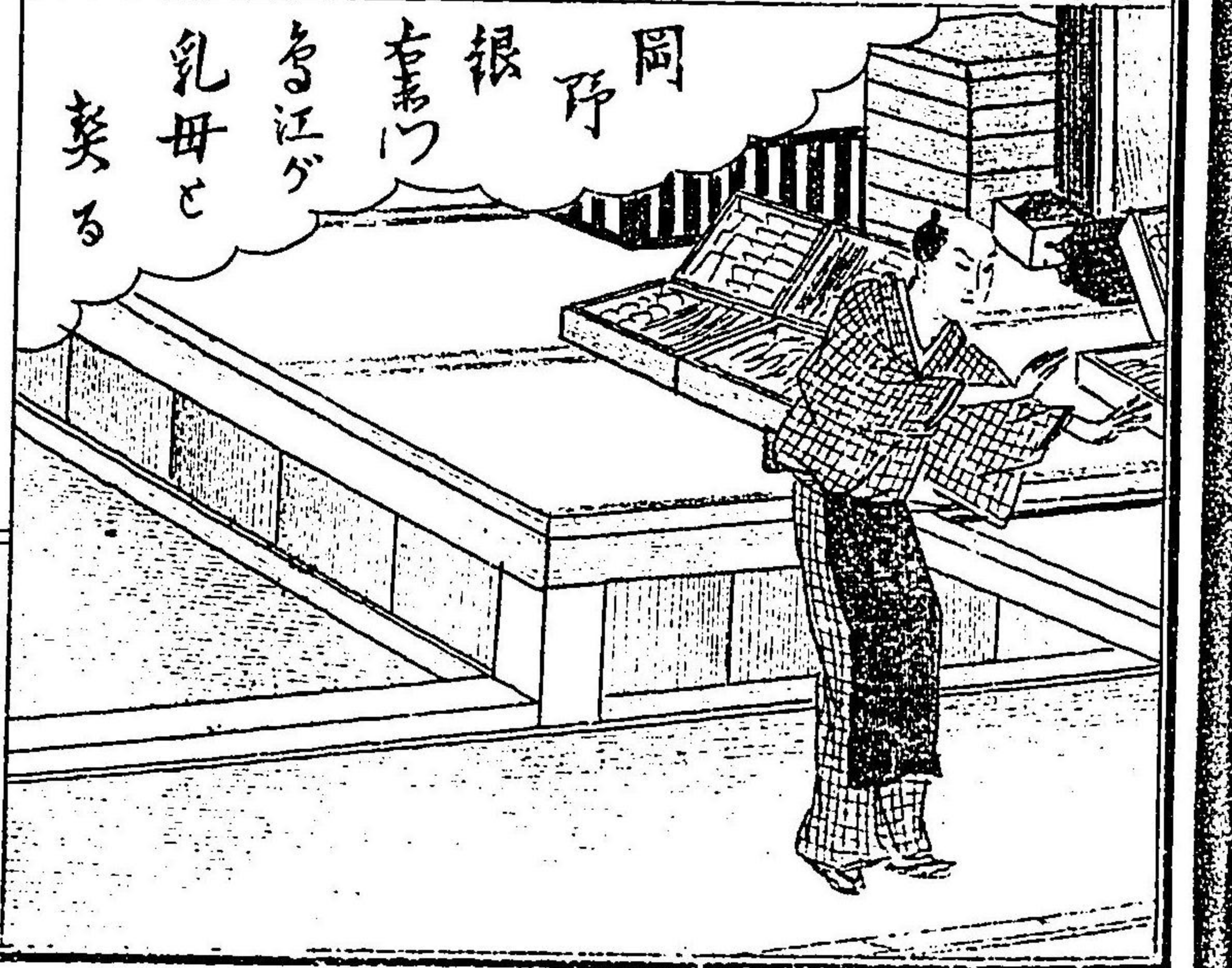
崎立仰りて三士呼けるハ今日師直が其堂より
 左右の長巻ハ又本より今少し遠き老もの
 悉く見廻べき見廻されて仰りしは上ハ家
 中の小夫中間杯と云る者ハ随分と老入りと
 永一合符居り或日師直が下人彼者よ来て
 物を買称五郎見をよて引る物店まれば一
 入はひいきたれとはとて酒などかして老入れ
 賤去のさしひ毛を直るよ一て日く彼者よ
 来り至つてん安く暇り後ハ外の間足腰
 なども方来り俱よん安く語り合月折ま
 れてハ宅中の分理を若向堂示より小夫の
 屋へいしるまでとそおれしり
 岡野浪ちり凍髪者ハ乳母
 妻よ言の師直が家には江治ちり娘の乳母
 わよふれてハ称五郎が店へ来りしハ思をま
 て能きま織りを得んと別くおするおどま



いづれももんさく成りて常は法は未だ
 岡野辰右衛門の父へ一が乳母も彼が
 男振まづ一体系を幸と辰右衛門の折振
 車も洗て口洗ければ女も兼てんをささ
 車成ハ後よりまき中と成り契り
 直が信介番士附人の振子
 うま安のりぬされども屋敷の内車ハ
 女杯があるべき事なれば凡手女が牙の
 必しやれが父ハ劍術の指有さま一父が身ハ
 金ちんとて番直成が師直の屋敷ハ以お松
 山蔵し介が身はまて時彼金ちん林泉
 て善後よりまき便して彼身はまき公を
 空淨りければ宜きま便を求ると大
 悦び或時辰右衛門の女も遣て云けハ我
 宛一五年の内は宿を求るまきハ
 手時夫婦と成てまきまき去まから親の



せぬ不美徒ももんさく成りて常は法は未だ
 明り表すての契りさ浩々と云ければ女
 ハ奇泪ぐ教さぬぬ牙を左極と思ひ
 ふと返まぐも時ければ上六命も何
 惜うも後ま持てまきんとまき親元
 至りて淨りければ父も大は悦びま辰右衛門
 ま遣て夫婦の契りをまきければ岡野
 常は父が身はまき屋敷で契りまきハ
 手より金ちんが身はまき屋敷の画圖
 得子時ま洗ければ辰右衛門大ま悦び山
 科もまきける大屋敷辰右衛門大ま悦び山
 辰右衛門は辰右衛門とて小見の如く思てハ父
 の志を後まき忠臣蔵の勤を双のんさくまき
 も父辰右衛門存まきまきまきハ
 と涙を洗うらんけ



繪本忠臣藏

繪本忠臣藏二篇

一月出版

繪本出版目錄

繪本忠臣藏 自初篇至六篇
繪本里見大傳 自初篇至三十篇
繪本三國志 自初篇至三十篇

繪本源平盛衰記 自初篇至六篇
繪本曾我物語 自初篇至二篇
繪本佐野報義錄 自初篇至八篇

明治十七年十二月廿二日出版御届

定價十五錢

編輯人

大阪府士族

長瀬忠次郎

北區世島通三丁目六十番地

出版人

同

平民

濱本伊三郎

東區北久太郎町四丁目四十二番地

岡本仙助

末區本町四丁目五十二番地

毎月一冊ツ、出版ス

